

といつて、片膝つき、船頭の袖の下から、優しい顔して差覗いた。

「垂井さん、垂井さん、」

何かいはうとすると耳を掉つて、水を吐いて、

「怪、怪しからんな、能役者。」

夫人は舷に縋つて手をかけ、

「あの、あの、此の幸之助さんが何なすつたのではないのです。私がお連れ申しました、此の方に罪はありません。」

而して貴下、どうぞ見通して下さいまし、榮耀に何處へも遊山に參るのではないのです。少々わけがありまして、手取の積へ行くんですから、

「待つておくれ、船頭さん、」

手取へ行くと聞くや否や、しやにむに打下さうとする棹を留めて、幸之助、

「其の方は、學校の教員でいらつしやる、滅多なことをしてはならんのです。」

拍子抜けに、

「はあ、然うかね、

きよとんとして、

「泳ぐ教員は弱つたね。漕ぎ出しや邪魔するだ、打拂くことはなんねえだ、熱として居りや船がまはるだよ。はあ、浪が黒うなつたわ、遙れるぞ、風が出た〜。」

其の白山嵐と見えたのは、立つ浪のそれよりも汀の一方の蘆であつた、銀河に輝く二三の星の、其處にもきらめくよと影を射返す、廣き白砂につらなつて、ざつといふ。

「や、どツこいな、」

と艫をおさへて、

「漕げねえでは、弱つたね。」

船人よ、然な困じそ、二人の言を肯分けたか、力及ばすと悟つたか、時に垂井はぶくりと潛つた。

「占めた、」と勇んだ船頭の、艫を押す腕は、鳥が翼を煽つやう、ふうはふはと漕ぎ出した。幾もあらず。

すぼんと舷に浮くものあり。ト見るとひよいと乗つて舳に蹲んだ、六尺の禪雪の如く、自身鶴に似たる一漢子、河童、河童。

船中しばらく寂として、舷を打つ水の音、艫の響加はれり。

「へ、へ、何、根ツからお役にや立ちません。船の邪魔をした奴かね、え、大丈夫、生命だけは
あるやうに片附けて置きましたから、御心配はございませぬ。

へい、何、もう此方で澤山でさ、また餘りお傍へ寄ると、貴女急に瘡でもお煩ひなすつちや大
變だ。

幸もまあ、何にもいふな。船中さ、
と多見は軽くいつて苦笑。

「なあ、要藏。」
駕籠屋め、又居やがる。

「まあ、誰方もあつちへ行らしてから、ゆつくりお話しが可うござります。」
ぎいと漕ぐ。

船頭も同類と、幸之助は唯うろく、巨山夫人は端然たり矣。

河童ばかりと煙草を吹かし、煙をパツ／＼と風に飛ばして、火皿の火をぐツと据る煙管。
「要的々々。」

「酔つて居はしませんや、」

「え、よつて、笑かすぜえ、お前、洒落か。」

「否、船頭でござります。」

「何をいつて居やがる。恚う、そりや然うと、今入から前はどうする、夫人をお連れ申すによ。」

「そしたら兄哥、お前さんお漕ぎなさいまし。鯉の漕のぼりをするくらゐの腕でなくツちや、あ
の流れは上れません。」

「泳ぐんぢやねえ、己だつて不可ねえやな。」

「尤も一日と一晩かゝりますつもりなら、曳船をしねえでも漕げますがね。」

「あひかはらず暢氣で居らあ。要的、矢張何だ、今入へつけて彼處から前は陸が可いぜ、然うし
ようぜ。」

「はあ、それが可うがしよ。又い、工合に行くと、お城下から例の馬を引張つて歸らつしやる、
嬢様に出ツくはすかも知んねえだ、時刻も彼是其の時分になりますでね。」

「然うよな、また罷り間違やあ、お客様を背負で走らあ。」

何、否、まさか素裸で、夫人、然ういや御無禮な、一張羅も引掛けやせん、未だ乾ねえもんで
すから。衣服は何、恚うやつて煙草入も、船の中に置いてあります。其ん時は夫人の、手や膚の

595

觸りさうな處へは、私が又新しい筵でも引掛けますよ、些ともお氣味の悪いことはありやしません、私にや懲りていらつしやら、は、は、は、」

と笑つたが、耳を傾けて顔を出した、夫人の聲が低いので。

「え、え、龍卷の時は扶けられた、飛んでもねえ、何、お前様、夫人。

はあ其を、……そんなことを憂慮ふのぢやない、陸へ上つてから、内から追つかけて来て連戻されはしないかと。

其御心配。

大丈夫、私が命がけの仕事をして、二度まで無理やりにお連れ申さうとして、其奴が九分まで行つて、おじやんで。

今焦うやつて夫人の方が御自分からお客においでなさらうといふのは、時節到来でさ、十八年の天津風だ、なあ、要的、」

「餘り天津風なことはございませぬ、い、かげんに衣服を被なさらねえと、かぜをひきますぜ。」

「何を爺め。
眞個でさ、夫人。それに今入にや飲屋がありますから、黙どもア入交り立交り、日が暮れりや猶のこと、五合極めて居りますからね。あとおさへに野郎の逆茂木を打つて置きますから。」

といつて又上げ煙管。一點の火は舷頭に裸身を照した。白山圍に入らんとして、其の斷片の一塊を、湖に投げたる趣あり。

ひた／＼と船を打つ浪も、蘆を颯と渡る風も、行方のほどは覺束なきが、艚は安らかに廻るのである。

要藏が聞きつけて、

「へい、兄哥、上藤が何かおつしやるよ。」
露玉か、何ぞと人の問ひし時。

八十二

「七夕様、へい、昨夜積で催しました、工夫が總がかりで以て威勢よく笹を立てましたから、草市だか竹節だか分りませぬ。」

それに又七夕様祭るたつて、月日の帳尻を合せるやうな、そんな問屋ぢやねえんでさ。

から、何月の幾日だか、ろくぞつぼう覺えて居ねえのが多いんですから、昨夜は何月の幾日だつてか、思ひ立つ日が七夕なんです。香

此の蒼々とした竹も、すく／＼と蜘蛛手に立つて、碇はじまつてつひぞねえ、涼しい並木が出来たんでさ。旗もひら／＼靡きませう、水も川原も一面の花の原、そこらにかゝつた蜘蛛の巣も、琴の糸をひいたやうで、優しいツたらありませんや。

箱や折鶴を上手に拵へよう、人形の衣服ならちよき／＼の、剪が利く娘子が二人。ついまた此の間新入の、赤い手柄で圓鬘といふのも居るもんですから、代物は白金巾でも風の佳い振袖の貸小袖、客人に繪師がありましたね、即席の友染と、お星さまのお目かけました。

朝妻船の唄ぢやねえんですが、七種の舟といつて、秋の花で船を飾つて、はい、七夕様めしまし、といふ訛もあるツてね。お嬢さんがおつしやいますから、三四十艘、鐵橋の土臺に繫いだ手取川の流し中は、一面に、桔梗、刈萱、女郎花、川浪の立つ處は、ざつと船へのりかけて、手入らず露がかゝります、美しいうございませう。

それが、夫人、私等見たやうな石ツころや土塊の中に交つて、可哀相な、撫子月草なんといふ花はあはれに咲いてますが、此邊でも名代でさ、あの、焼河原。おまけに鶴嘴でカツチリだ、火花にも焦つちまつて滅多に薄だつてねえんですがね。

一寸洒落に、活きた熊が食つて見てえと御意なさりや、折れねえ竹槍を拵への、直にも白山へ飛込んでね、引背負つて歸りかねません、から、豪傑な奴が揃つてるんで、近山をあさりました、薄も萩も一所です、綺麗だから可からうと、紅蔦なんぞも玉にかゝつて、大束に取込んで来たでせう。

女連で、船を供へたり、衣ものを貸したりするのなら、何でも構はねえ志だ。此方等風情も

奉れと、萬力に朝顔の花を咲かせて、控綱に其紅蔦。序だ、おれツちも手向けて遣れ、と棕櫚の毛見たやうな蓬々髪に、あたり木槿の花を挿して、素裸で、のそり／＼と歩行く奴もありますし、萩の枝の長い奴を、斜ツかけに胸へ結んで、野中の地藏はどでござんす、といがぐり天窓をふりたてる野郎もあり、然うかと思ふと、不精な奴が、薄の中へ潜り込んで炎天に晝寐を極めます。尤も其の棟梁からお許しが出て、一日休みと来たんですから、腕白のしたい三昧。

ですが、根がそれ雲上な思ひつきで、お嬢の附合に遣るんですから、相撲を取るの木登りをするのツて藝は行りませんがね、娘ッ兒まじりに鬼ッこなんぞして、一時は随分な騒ぎでした、中にやどういふつもりかね、凧を上げた男があります。笹ッ葉にや、晝に描いてもお定りの、五色のびら／＼を結へましたね、これにや先生のいひついで、何でも銘々親兄弟にもあかさねえ、極内のことを、構はず、是といふ、百年目の望を書き出せといふんです、夢を見たやうなやつが、怪しい字になつてあらはれて、煙草の煙が蛇になつた體に笹ッ葉の中で中天に煽つてをかしうがした。

此の蒼々とした竹も、すく／＼と蜘蛛手に立つて、碇はじまつてつひぞねえ、涼しい並木が出来

處で、七夕を祭るのに、また其の七箇の池といふのがありますつて。盥を七ツ並べるのも、俄雨が漏るやうでをかしいからつて、此のあたりに名のきこえた、七ツの池へ、お嬢さんから、一人づゝお使者が出ました、先づ一番には鞍ヶ嶽の浮鞍ヶ池、とぞ語りける。

八十三

河童 舩に指を折つて、

「二番が鶴來街道の、比咩神社の鏡ヶ池、三番が同一街道の傾斜地蔵、こゝの溪川と、城下端れの、首なし地藏の清水とは、池といふんぢやねえんですが、結縁がおあんなすつて、代參が立つたわけです、何處へも蠟燭を流しました。

それから早走りの達者な奴が、越中へ飛んで、礪波山の繩ヶ池、白山の千蛇ヶ池、金澤の眞中、兼六園の龜ヶ池、と恠う七ヶ所。

路のりのあるのは草鞋穿きで、もう前の日に發つたんですがね、此の使者が皆な歸つて、頭數が揃つた處で、七夕様をかねて、昨夜、お精靈様の縁組の、三々九度がありました。

亡者同志が御婚禮、こりや、もし、些とおわかりにはなりませんめえ、夫人だ、構はねえ、饒舌つたつて仔細はねえや。

恠ういふわけです。

私等が、お持佛、御本尊といつたやうな工合に、夥間のものが信仰をして居ます、學者の書生さんが一人あるんですが、こりや其の、些と理由がありましたね。

世の中へ對しては、死んだ事になつて、日本六十餘州、地獄を除いちや、唐天竺にも戸籍がねえてつた、いはば影法師、幽靈のやうな方なんです。

すると何と、世間にや珍しい、いや、難有え、心中立てもあつたもんです。其の幽靈を追つかけて同じ冥土へおいでなすつた、天人見たいな女があります。ひとつことでも、借金取を鬼だと思つて、眞暗な戸棚へ入る境界ぢや、ころりと地獄へ一足飛、大した藝當でもありませんが、其の方は何と、立派な御華族の姫様ださうぢやありませんか、十萬億土を歩行くんだつて、大概草臥れて了ひます。

處でまあ、顔だけは暗い處で、お逢はせなすつたやうなもの、これが死んでるんぢやありませんから、蓮の臺で新世帯つて、鼻唄の眞似は出来ません。

で、若い方たちが、一ツ碯に落ちながら、めつたに口もお利きなさらねえなんぢ、何のため、此方人等血のある人間が一所に生きてるんだか分りません。又、大して生きて居るとなるほどでもねえんですが。

勿體ねえ、それに煮焚きも自分でなすつて、時々は私等がほころびも縫つて下さらうといふも
んです。そんな時は得てどうも賽の積が極樂にボンとでんぐり返つて、私なんざ、鬼が辨天様
許へ居候に行つたやうな、變な氣がしてならねえんで。

組合のものが徒黨をして、夫婦におなんなさいって、番ごと勸めて見ましたがね。どうしても
お肯きなさらねえ。何、お嬢さんの方は、さすが女だから、夜中なんざ、夢に嬉しいことでもあ
るやうな、寐顔で居なさいます様子もねえぢやありませんが、先生の方が頑的で始末にをへねえ、
で皆が弱つて居たんでさ。

處へ火の玉が飛込みました。

といふのは、先生にや仇敵。其奴のためにお二人とも夫婦におなんなされる事が出来なくなつた
といふ、事壞しの發頭人。

もし、お差合ひがあつたら御免下さい、堅川昇つて少尉の旦那だ。若いのに豪傑でね、私等が
兄弟分も、つい其の方に殺られました、其の前でさ。

はたしあひをしよう、といつて日までちやんと極めて、お嬢さんまでいひ込んだらうぢやあり
ませんか。

容易でねえね。

御本人に話をすりや、一も二もなく、オイソレで御合點、呼吸が絶えるのを病氣がなほるやう
に、人に殺されるのを蘇るほど嬉しがるつて、かはつてるんだから不可ません。

どうしよう、と思案に餘つて、長靴の大將つて、名はさがつてますがね、あたゝに分別のある
伯父さんに相談をなさるのを、眞夜中に、夫人。

立聞きをしたのが私、對手にや私が、とおさきばしりて、罷出ようとする、前へ立つてづい
と入つたのが捨吉つて、天から降つて來たやうな魔物でさ。」

八十四

「(まあ、貴下、)つてお嬢さんもおつしやつた。一體其の晩は私が何でさ、お嬢さんに見せるも
のがあつて、お休みの處へ行つて居たんで、其の相談對手の大將と、入ちがひに天幕を破へ出ま
したがね、水の星に映ります、薄あかりに、ぬつと立つて居たのを其の人かと思つたくらるで。
村岡さんつていひます、御當人と、其の捨吉つて奴が不思議なほど、顔も様子も似て居るんで。
夫人の前ですが、お嬢さんは、まあどうして情人が這込んだらう、と内々嬉しかつたでせう。
丁ど、よく考へて見ますつて、其の長靴の出たあとなんだし。

それに飯を喰ふ時も、放した事のない大弁が一挺、額のほくろぢやありませんが、其が目印で

分るといつた代物を、外へ立てかけて推參に及んだから。

しばらく二人とも黙然でひっそりして居ましたつけ。

(村岡さん、よく入らつしてね)といひました。

野郎の聲で、

(はあ、暇乞に來たです。時に遺言があります。捨吉といふ大斧を御存じか)と奴が聲で少しふるへながらいひますからね、

(知つて居ますとも)とお嬢さんが。

(私が死んだら、夫婦になつて遣つて下さい。あの、馬鹿野郎は、貴女に惚れて、近頃は時々大斧が重いといふのです。)

やがて大笑ひをして、

(其處で、あんなものの女房になるのに、貴女がそんな四角な字なんぞ讀んぢや不可ん。持つて行かう、それから一生に唯た一度ぢや、其の扱帯を、)

といつたが、しばらくして、

(いや、大斧を使った數ほど、口を利いたことなし、唯今くらゐものをいつた事はつひぞ覺えん。今夜饒舌つた數は、是までに殺した人の數と同一ほどです。恩も義理も何にもない、おやすみな

ん。

といふと、最うづいと出て來ま。

大斧をぶら下げて、跣足でびたくと、夜露を踏んで行くのを、遣り過して背後から見ますとね、小口の揃つた本ですが、扱帯で結んで、肩へ振かけて居ようぢやありませんか。

フツと天幕の燈が消えました。

私あそれまで見て、すたくと捨の奴のあとを追つて、振つて行く手をおさへて、

(私にや暇乞をしねえのか。)

ツていふと、二ツばかり顔をしゃくツて、

(達者で居ねえ)といふんです。

(罰の當つた野郎だぜ、恚う、手ぐれえ握つたらう)と密ときいて遣りますとね。

(そりや、己にも分らねえ)ツていやあがつたツけ。ドンと下りました。石を攫つた低い河原を、今度は大斧の刃を空にして、稻妻が消えるやうに、暗に隠れて了つたんですが。

あの、名だけを聞きなすつても厭な心持におんななさいませうがね、黒髪谷の何でさ、櫛の神の堂の前の、大杉の幹へ、果合の對手の少尉さんの洋刀で、咽喉を縫ひつけて立竦みになりましたたつてね。大方あんな、笄をさした蛭や、髪長の蛇も居る處、今に眞赤な清水になつて森の中か

ら、田圃へ流れて出るだらうと、つい此間まで、夫人、あなたのお邸で不寐番をして居ました、
眇がね、女房づれで磧へ飛込んで来て話しました。

一件の大斧は、扱帯で結へた本と一所に、少尉の旦那が引取つて、馬の鞍へ振分けに掛けなす
つてね、今は世の中に自分を措いて、他に知つたもののない、村岡不二太は確に死んだ。果合に
は敗亡したが生命は己がながらへる、と悄乎々々と手綱を解いて、これから捨鞭を上げて、馬の
呼吸の續くだけ、田も畦も一文字に、山も森も突切つて、行先は五十里百里、馬の倒れた處を最
後に、堅川少尉の墓を立てる、あとは軍隊へ奉公ぢや。戦争のある時は、眞先がけて討死する、
いづれ壘の上では死なん、と、捨吉夫婦に言づけを頼む、といつて、一度鞘に入つた劍をすらり
と抜いて、杉の木に死骸に禮をなすつて、森の木精が飛び出るやうに、馬を躍らして、鱈爪で颯
と、木の葉を捲いて、おいでなすつたつていふこつてさ。」

八十五

「眇はまた何なんです。」

夫人、御前様でいらつしやる、巨山さんが、見え隠れについて行つて、少尉が決闘をなさる行
先を見届けて、もしもの時は、手傳へ、といひつけられたさうでございましてね。

鐵砲を擔いで、駢足で馬のあとをつけたんですつて。黒髮谷で、對手と出會つたのを機會に、
小隊伏せ、とやり、蛇がすらからうが、蛙が這はうが、びくともする奴ぢやありませんや。

片目を落葉の上へ、烏豌豆とやつて青く光らかに居ると、南無三寶、少尉が組伏せら
れて危えから、其ま、引金に手をかける、と氣がさしたか捨吉が、屹と其の方を振向いたつけ。
手が少し震へたといふんです。

其の前に、あてのない龍卷の雲を見かけて、一發空を撃つてからは、たまは外れないといふ信
仰が薄らいで、何だか其時も心許ないやうだつたさうですがね。

ズドンとやると、パツと憊う、目が煙でかくれた。

ト見ますと何うです。少尉も、大斧も、兩方へ分れて杉のやうに突立つた、其の中の向う正面。
大木の根が震へたほど谷に籠つた、森の響まで、櫛の神の片扉こなぐになつて崩れた突あた
りの黒い壁に、雪のやうな女の顔、浴衣の袖に炎がからんで、めらくと宙へ燃え上つた、目鼻
立ちも、娑婆に類のねえやうなのが判然して、焚かれながら莞爾しましたさうでしたつけ。咽喉
へ火先の絡んだ時、がっくり首を垂れたやうに、上から、はがれて、紙が落ちると煙の中へ、む
らむらと、髪の毛が亂れたさうで——繪姿なんです。

(やあ、お龍様)

(嬢さん)

ッて、少尉も大斧も堂の中へ駈け込んだ。焼けたのは其のお嬢さんの繪姿だったが、血だらけになつて、虚空を攫んで、肋骨の蒼い胸から、腹へかけて、ぐる／＼まきにした藁繩が、床板の破目へ結びつけられたやうに見えて、白髪を振亂して踏ざりかへつて居た、七十ばかりの媼が一個。此の三途河めが、外れ彈丸に中つたんで、こりや三太の養母でさ。

いや、凄じかつたのは、繩簾がちぎれたやうに、八方へ、鎌首を立てて、尾が下へつかないほどに、宙をひよ／＼と走つた蛇です。颯と音を立てて消えましたが、あとにや數の知れねえほど、吃驚した、蟄、蜥蜴の類、目をきよろりとやつたり、腮をばく／＼して居すくんだ形でございますましたと。

今繪姿の焼けた、六尺ばかりの手前に、白い蜘蛛の巢で釣つたやうに、岩で疊んだ、こんろ體のものを置いた、上へ大鍋をかけて、青苔の生えた、大石がづつしりと乗つかつて居ましたッて。さすがに揃つた豪傑連も、これだけは蓋を取つちや見なかつたさうですが、此の臭氣です、蛇のつながつて、ぞろ／＼と飛んだ火花にや、驚かなかつた、連中も、中のいきれと其の臭氣に、むツと呼吸が詰まると、たら／＼と膏汗を掻いて、退つたつていひます。

其の筈で。

(なう、苦しくば繪姿の婦人に崇れや。ぬしたちの身うち熱さで、あの姫を焼けい喃、六尺と放れぬが、未だかいなう、未だかいなう、と呻つちや、長爪を立てて、其の一々、いはくのある蟲どもを、釜の中へ掴み込んだや、血走つた目で、むかうを見詰めて、松の枝木にやにの湧くやう、手も足も汗ばみながら、片膝を胡坐して、火を煽いで煮やがつたさうでね。

日がな、夜すがら、まんじりともしないで、つかみ入れ、時々湯玉さへ飛んだつていひます。何十足、引きすり込んで、出口を塞いだか知れやしません。

其中に、天井をやつと支へる、蔓葛のからんだ柱に、裾から胴まで、下メと扱帯でぐる／＼巻古手拭で猿轡を突込まれ、無理に紫陽花を咲かせたやうに、眞蒼になつて、半死半生、漸々活き返つて、此の話をしたのは、お節といひます、三太の女房。

嬰兒は目を眩して、蟲の中に仰向けになつて居ましたつてね、
風は鬆々として船中の人の鬢を吹けり、暗夜を船の行くこと急に、雲の流る、時々、星一ツきらりと輝くのは、芙蓉夫人の中指である。

八十六

「巫女の仕種を御覽じまし。婆め、然る人に、といつたが、巨山の御前でさ、繪はね、幸」と顔

は見えぬ胸の間を呼んで、河童溜息を長く吐き、

「お前も聞きねえ。チョツ私が膽入で、お嬢さんが、一日、身體を貸してお呉んなすつて、妹婿が丹精で、見事に描き上げた姿でさ。」

お妻はそれを持つて行つて、其ツ切歸らねえ。久しい間お待兼ねだつた浮世繪なんです。可うございますかね。

處で、それを種にして、お嬢さんを呪ひ殺さうといふ企みだ、頼まれたのが、三太の阿母。

南無阿彌陀佛なんと吐かして、數珠をぶらりの、一日晩方、鬼の留守と思はしやれ、と凄く一つ、嫁を睨んで失せたんですつて、七日たつと、大いきをつけて這ひ込んで歸つて來た、五日ばかり大病人。

どつちが病人だか知れねえほど、腰をさすれ、足をた、け、あののもので惱まれたさうです。婆奴、こゝで中休みをして氣力を養ひやがつた。

風呂に入つて身繕ひをして、嫁を膝許へ引きつけて、私が出て行く六日目の晝過ぎから、お主、家を出て、黒髮谷へ尋ねてござれ、櫛の神様のお堂で逢ひましょ。

三太をはじめ、主たち親子の福を願うて、お籠をするのちや。私は斷食ぞの、仇や愚には思はさるな、屹といひ置くぞの、といつて、又蝙蝠の飛ぶ中を、ふらふらと出て行つたんですつて。

黒髮谷と聞いただけでも、身の毛は慄立つたさうですが、櫛の神より恐ろしい、姑婆のいひつけどから、其の目になると、淺黄の紐で、嬰兒を引つ背負つて、お持佛の前の暗い處にや、いつでも婆の目の光る、白髮の鬼の棲家とは思つても、朝夕棲馴れた我家でさ、何だか戸締をして出たあとが、見納めになるやうで、つい、ほろ／＼と泣きましたつと。

鶴來街道を横道へ入つて、これから人通のない、啜へ切れて、向うへ森を見た時は、もう其の梢へ、蒼い煙が濃くかゝつて、白山が眞白に、目の暮れだといふんです。

森の入口に、婆め、薄汚れた白いものの扮装で、杖に縋つて待つて居たつてね。否も應もありませんや、する／＼と引き摺りこまれて、堂の中へ入れられると、最う氣が遠くなつたといひま

さ、蛇の上へ坐るんですもの、きやあ、といふと其ツ切。しばらくして氣がついたさうですがね、早や其時は、柱に縛られて居たんですつて。足が震ふのか、蜥蜴が跳ねるのか、縄がゆすぶれるのか、長い奴が絡はるのか、様子が知れねえてツた工合ですから、すぐに又氣が遠くなつたさうですが、こゝで目をまはして居られなくなつたといふのは、婆が、夫人。

大事な嬰兒を素裸にして、ぎやあ／＼泣くのを、膝の上へ、鬼を生捉りと、ぎうと壓へ、(相手の姫が、した、かに位が勝つてうせをるで、蟲の力ではあかぬさうな。お節や、婦人の念

力ぢや、此の火が向うへ飛びついて、繪姿を、裙から燃すやうに、一心に祈らうぞ。其の呪詛が利かぬといふとの、蛇のあとへ、墓のあとへ、蜥蜴のあとへ、また蛇のあとへ、墓のあとへ、蜥蜴のあとへ、そりやく／＼嬰兒を入れて沸るぞいの。

と一ツからんぢや放り込み、又摺んぢや突き込んで、片手で濫團扇だ、煽ぎ立て、
(苦しくば姫に崇れ、飛び出して噛めいなう、熱さの思ひで焼きをらう、)といふ。
間にや、天窓へ拜み手を上げて、

(櫛の神の御前様は、櫛の神の御前様は、そこな女子のやうに縛られて責殺されていはさつたに、生かはり、死かはり、百代まで崇るとなう、繪姿を御覽ぜい、二十代には未だならぬ、藩主様の家の姫ぢやぞの、崇らされ、崇られい。)

「兄哥、厭な聲だ、
と要藏もたまりかねる。

八十七

「は、は、いや、串戯ぢやねえ、眞個よ。
え、夫人、私が地聲で申上げたつて此のくらるな、恐れたもんですぜ。

聞くばかりだつて、大概な豪傑も草臥れつ了ひます、それを何と一夜ですな。

あけ方にや嬰兒の聲もかれて、お節も、もう、唯遙に呻いて居たさうで。
音も立てねえのに、又猿轡を噛ましたのは、人の兇音を、婆め、き、つけたからなんですか。

そこで、決闘のはじまつたのを、嬰兒をぶらさげたなり、杉葉で、臭の漏れねえやうに破目を塞いだ中から、膝行つて覗いて居たさうです。養子にもしろ、自分の兒の、三太が鐵砲で小氣味よく、それ、今申した通。

そりやい、が、どうした發奮か、火から六尺放れた壁で、其の繪姿は焼けたんですぜ。うつかり城下へなんぞ行らしつちや不可ません。假にも工夫の五人だけは傍に居る處よりお離れなさらねえやうにつて、皆が氣を揉んでいふこつてすがね、お嬢さんは、驚かねえで、いづれそんなこととせうつて、澄して笑つていらつしやいますが、此方人等、其のためにや、鶴龜の百萬遍を遣つてまさ。

しかし禍が幸で、お嬢さんは、まあ、假にもそれで焼殺されたも同じ事、村岡さんも自殺をして死んだ體になりましたから、これをキツカケに皆が勸めて、やう／＼手取の兩岸へ御直り。七箇の池の使者が揃ふと、野天の磧、銀河の眞下で、手取川の水を汲んで、三々九度があらうといふんで。

朝あさから其その七夕たなばた様の催もよほしでさ。黒豆くろまめのお赤飯せきはんを、蓮はすの葉はに盛もつた奴やつで、變かはつてませう、私等わつしらは前まへ祝いはひ。

越中あつちうの繩なはケ池いけへ行いつたのが、一番ばんがけに、晩方ばんがたでさ、草鞋わらぢも汚よごさねえで歸かへつて來きました。續つづいてあとから、菅笠すげがさの見みえたのは醫王山いおうざんから歸かへつた男をとこで。

鶴來街道つるぎかいだうへ向むかつたのは日暮ひぐれに磧かはらを出でましたから、一番ばん遅おそく歸かへつたでさ。夜よるの九このツと思おもふ時とき、石いしの上に筵むしろを敷しいて、此處こゝへ兩方りやうほうから、二人ふたりで差向さしむかひにおんなすつたがね、何なんと、御婚禮ごこんれいの席せきだといふのにトんと首くびの座ざにお直なほんなすつた形かたちで。

お一人ひとりが乞食坊主こじきぼうずのやうな形なりで、座ざへ手てを支つかいて畏かしまると、お嬢ぢやうさんは、あゝ、婦をんなです。

それに娘むすめたちがおつき申まをして居ゐるんですから、これが夜よどほしで縫ぬい上げて、髪かみも、珍めづらしい高髻たかまげで、水紅色すみいろの長襦袢ながじゆばんに白絹しろろのかさねで、おみなりも丁ちやんと出來でた。三太さんたの女房にようぼうに手てを曳ひかれて、裾すそを曳ひいておいでなすつた時は、皆吃驚みなおどろしましたが、争あそはねえ、おうまれば又格別またかくべつ、一寸狭ちよつとぢやいらつしやるが、尋常人たゞびとでねえ處ところへ、薄化粧うすげしやうと來きたんだから酷ひどく雲上うんじやうで、何なんとも譬たとへやうはありませんや。

だから、私わつしあ、お杯さかづきの水みづを汲くむのに、どうぞ、磧かはらや船ふねに飾かざつた、ありつたけの草花くさばなの露つゆでもすくひためて、飲のまして上げてえと思おもつたんで、まさか然さうもなりませんからね、せめて清きよい處ところを、

と泳およいで、眞中まんなかの水みづに、銀河あまのがはの映うつる處ところを、一ひとツ手桶てけづ提たげたんです。

三太さんたなんぞ、其そのお姿すがたを一目拜ひとめをがむと、ぶるゝと震ふるへました。だつて、何時いつかの夜よるは、ほんの一ひとツ掠かすり、其その方かたの元結もとゆびを射切いつたんだ。危あぶえのなんのつて。でも何なんです、兎とも角かくも女婦めをと揃そろつてるといふので、眇夫婦めつからふとが媒妁なかくどやく役やく。

えゝ、未だま申まを上げませんね。ああの眇めつからはね、私等わつしらが妹いもうとです、お妻つまの奴やつが、お館やつかたへ參まゐつて、唯酒たゞさけに酔よつて、欄干らんかんを踏ふみはづして、湖みづうみに溺おぼれておめでたくなつたんぢやねえ。どうして死しんだつてことを知しつてました。」

はじめはじめて一聲ひとこゑ、美樹子みきこが、私わたしも存ぞんじて居をりますよ。」泣聲なきこゑの、幽かすかに漏もれたは幸之助かうのすけである。

陰風いんふう横よこさまに人ひとの衣髮いはつを拂はらつて、船ふねの音おとは愈々いよいよ高い。否いな、何なんにも夫人おくさまに言もん句くはねえんで。幸かう、あきらめろい！ 仇かたきは仇かたきだが、何なんもお前めえなんぞ、どうにも出で來きるこつちやねえ。」と舷ふなはたへ煙管きせるをコツつり、火玉ひだまは風かぜに飛とんで、眞暗まっくらな浪なみに消きえた。

「それでも主従は三世と思つて、未だ鐵砲で御奉公をする氣で居たが、狙が狂つて、姑婆のどてツばらをやつてから、もう鐵砲は駄目になつた、と覺悟を極めて、嬰兒をト十文字におんぶして、お節の手を曳いて手取の積へ駈け込みました。

それツてツて、ばら／＼と取り巻くと、鶴嘴や、鳶口の下に女房を庇ひながら、鐵砲を持ちかへて、臺尻を上げて、いきなり、其處にあつた枕を、ぐわん／＼と打ちましたよ。
譯の分つた野郎でさ。

ですから鐵砲の媒灼だつて、些とも危険な事はありやしません。
無事におさかづきは濟みました、尤もはや水杯ぢやありますがね。

それを一口めしあがる時の、お嬢さんの、恚う、うつむくといふでもなし、見据ゑるといふでもなく、初心に内證にはにかんで、ふツくりなすつた、顔色は、恚ういふ中にも、ちら／＼目さきに見えてなりません。

や、此の様子ぢや新枕の睦言も思はれる、天人でも、龍神でも此の道にかはりはねえ、と胸一杯になつて、不殘萬歳の吶喊の聲。

銀河も氣色だつて、天幕へおしけとなりたまふだ。
これから、何でさ、夥間の良助といふ奴が思ひつきをいつたさうで、お精靈様へお手向けの、眞桑瓜の二ツ枕で、蜘蛛の巣のお床入といふ時に、

(一所に來い、多見治)ツて私を連れて、どうしたのか。ほくり／＼、長靴でお聞へ侵入に及んだのは、長靴の大將、と前刻にもいひましたつけ、屋島藤五郎ツて伯父貴でね。

御大人其の時、嬰兒を抱いて居ました、子煩悩でね、三太の悴を抱き詰めです。
媒灼人の手助けに殊に其の日なんざおもり役で、婚禮の場へは出ませんでした、御馳走のさしづなんぞして居ましたつけ。

おや、妙だぜ、大將今頃何をしに行くだらう。いくら思ひ合つたお方たちだつて、今から手本を見せつけの、嬰兒の催促もかきなものだ、と思つて居ますとね。

お聞に推參に及んで、妙なことをいひました。

(失禮、此の時刻に恚やうな事を申出でますも、いかゞでありますか、)なんと慇懃に、
(川浪に泡が立ちました、私嘗めて見たであります、私長年の經驗に因りますると、俄な出水

と心得ます。

背後の堤防へ、一先づ御避難が願ひたい、如何でありませうか、貴下がたの御見識ながら、私の言を御信用下さいませうか。

嬢さんはお寝衣をめしたなり、先生は、未だ法衣のまゝで居たんでさ、直にあとについて出なすつた。

長靴の大将、空を指して、

(御覽なさいまし、銀河が横縦に動いて見えます、水が映ると心得ます、はや、白山の麓は漲つて居りませう。) ツツて沈んだ聲でいひましたつけ。成程、一ツ片の雲もない、昨夜は星が、黄金の梨地を蒔いたやうに磨出されて居ましたつけ、白山の空あたり、銀河が何となく、手取川の浪に揺り動かされて居ますやうで、水気が満ちて、而して夫人。

秋の末方の水が、落鮎の錆を持つた鹽梅に、どんより焼瓦の色に見えたんでさ。堤防へ上ると、それからそれへ、大将の手の緑色の瓦斯の光が、ひらくと傳はつて、瓦一面、ちらりちらりと狐火が燃えては消え、岩を打つ蒼い火花が、散つちやなくなる工合でね、物凄うございましたぜ。

半時経たない中に、千五百人ばかりが、護謨布を乾した形に、黒く、真直に並びました。居たり、蹲んだり、足を草へ投出したたり、左右に一里ばかり、尖の揃はねえ生垣を長く築いた工夫の

列の真中に、すつきり立つたのは棟梁でさ、夫人、水上先生ツて親方です。

工學士は恚くして、其の半生の業を破壊し去らんとして押寄る水を待つのであつた。

八十九

「私等は其の棟梁の右と左に肩を擦合せて控へたんです。

尤も、真先に、堤防へ上つておいでなすつたのが先生で。

一言もおつしやらないでね、凝と正面に、二條早や向うの岸までかゝりました鐵橋の桁が揃つて、大きな、水機關のやうに眞黒な虹を渡して、波が處々ちらちらと白く碎けます。

手取は名代の荒河で、岩が出たり、淵になつたり、水上の方は斷崖の山の裾が、毎日毎夜少しづ、歩行いて居るてツた御難な奴でね、場所の可い處を選んで、其處はちゃんと先生が承知之助でいらつしやるが、又どんな拍子で、牛も馬も流れて来て、打つからねえとは限りませんや。

御心配なことは一通ちやありますめえ。

また橋が、びくとも動いて見やあがれ、私等だつて川の神を唯置くものか、と固唾をのんで居ましたといふのは、段々其の空の色のドス赤いのが近くなつて來るんですもの。

寂として鼻いきの音も聞えなくなつた時でさ、並んだ列の、雲だか川だか、紛れ込んでぼつと

して見えない遠くから、わあ引と夜中に練兵場の吶喊の聲が聞えますとね、まはりの赤くぼやけた、鼠色の雲が、私等の眞上を三ツばかり矢のやうに飛びましたつけ。土手から眞直に川上の方へ、汚い綿を小山ぐれえ堆く積んだと思ふと、何千ひろとも知れませんが、灰汁に瓦色のさした水が、大浪をうつつて來ました。

いきをする間もねえんでさ、一面の白泡だ、其の泡も、人の胸の波を打つのも見えました。明くなつて、何の事はありません、天の川が、ざぶりと娑婆へ落つこちたやうなんです。積も、何にもなくなつて、世界の果の海のやうな中に、眞黒な鯨の背が、薄りと浮いた形に、半作事の鐵橋が水の上へ出て居ました。

皆、思はず知らず堤防の上に脊伸びをした、私等のくるぶし、婦人なんざ、裾を上げねえきやならねえやうに、太つ脛のあたりまでつきましてね。丁ど泥水の天を浸す中に、鐵橋は土手の工夫を左右に並べた、先生の胸で、丁の字の形でした。

天の川も、水の泡も、白山もしらくとあけて、もう、水は二三尺。先生の莞爾なすつた顔を見ました時、あの何でさ、眼鏡がきら／＼とした時には、踵の下をひたひたと擦つて、退いて行く……

鐵橋の土臺は一寸も、五分も狂はなかつたさうですが、七夕の催は草葉の一束もない。

天幕は残らず攫はれましてね、萬力ばかり轉つてるんで。

(私の趣向はかさゝぎの橋でした、お二人で散歩でもなさるが可い)ツて、お嬢さんと、お二人の両手を取つて棟梁がいひましたつけ。夫人、私ア短冊には何にもぬたくらせはしませんでしたが、望みは、貴女を攫ふんでした。

前刻、お庭の四阿で、幸と、内證ばなしをなすつた時、誰もきいて居ねえと、思ひなすつていらしつたらう。

ですが、水中で、魚が聞くとまではお心がかねえでさ。

私ア人間だか獣だか、魚だか分らねえんで。

積へおいでなすつた上の、お考へはどうだか知りませんがね、御心配なさることはねえ。長靴が居ますから、誰のはなくつても棟梁の水先生のおすまひなさいます、天幕は、今朝の内に出來ました、夜露は凌げまさ。

といったが、

「お、雨だ、」
雫は射るが如くばら／＼と斜に來た、時に芙蓉の湖の色は、略昨夜の洪水に似て居た、浪が立つて、夜が動いて、小船は影のやうに小さく傾いて顯れたが、恰も可し、今入に近いのであつた。

此の一行を、不二太とお龍が導いて、其の夜、工學士の天幕を音信れた時、夫人は既に覺悟があつて、端然として卓子の此方に宣告を待たつたが、工學士は、はじめ美しきパノラマの、急に小屋を飾つたかと思ふが如く、無邪氣に夢見る顔色であつた。
忽ちにして、此の人々に擁せられつつ、あはや息絶えんとするものやう、面は蒼白なるものとなつた。

「先生、お土産を、」

とお龍が取次いで、夫人のこゝに齎した驚籠を卓子に据ゑた。

不二太懐中から一枚、昨夜の名残の黄なる七夕の短冊を直して、

「天でない、地でない、人でない、鬼でもない、水上君、洪水のために流された七夕の仕直しをする、祕密な希望を銘々書きあらはすといふ趣向だ。工學士、君の望を。」

と立直つていつた時、屋島藤五郎は矢立を進めた。

筆を取つて、卓のふちに軸を立てた工學士は、件の驚籠を、磔と磔に擲つたが、一世の麗色、見るがうちにとおろふる夫人の面を屹と見て、

「大工の内職をお持ちになつて、未だ侮辱するか、夫人、」

とて、靴を擧げて、踏み砕かうとしたが、敢て不爲。筆を取つて、黒の背廣の片肘を支いて、圖を引く如く極めて沈着に認めた、其の辭にいはいはく、

予は唯一日も速かに北陸線を完成せむ。

大水牛

年を経て柳の線、金澤に開通し、はじめて機關車の運轉せし日、この大水牛、磊々然として、鐵線の上を迂り來る偉觀に驚き、當日の群集警戒のため派せられた警官を巡視して、馬上に赤き髯をそよがせて居た十時猛連の其の馬、一文字に棹立ちになつたため、手綱を引しむる違あらず、眞倒に落馬した。

驚破と見て、線路を突切つた木谷巡査は、車の齒にひかれてけり。

眞先に此の不祥ありし機關車は、金澤に着くと、市民が萬歳の聲を押分けて、豫め貨車に積んだ、一個の棺を昇出した。

法學士唐澤新助氏は、職を辭して、故郷をあとに、此の機關車とともに引返して、漂然として別れて去りぬ。

其の日彼の棺を請取つた製絲會社社長堅川は、蓋を開いて、先づ雪を見た。雪の中に、雪よりも潔く、玉よりも美しき唇の、なほ紅なる、美樹子の死骸を認めたのである。

是より先、夫人が生命存らふに耐へざるよしを、幸之助が取次いで、辻に、町に、告條の趣を實行せられんことを求めた時、阿修羅、風流の袂を列ねて揃へて、大きくあたりに輪つくるのみ、一人の進むものがなかつたのである。

須臾して、衝と出でた、一個僧形の青年あり。御心中お察し申す、と、即ち小刀をそばめて、夫人の項にさしよせたが、手が震へて思はず、地へ。

更に短銃を構へたけれども、這般の兇器、到底其の膚を傷け得るものにあらざるを知つて、又衣兜に納めた。次で少年が手にした鼓の紫の緒を其の白い咽喉にかけた。此の亡骸を、長く白山の雪に藏したのは、屋島の好意、やがて棺を、最初の機關車に曳かせたのは、工學士の心中であつた。さて其の時夫人の袖の、礮に崩れて散る下に、幸之助は落ちたる小刀で胸を刺した。

われはじめて死すべしと、巨山夫人を善智識として、不二太は短銃を口に含んだ。屍は、非人小屋を壊ちたる、屋根、柱を以て焼けよとて。

此の命を奉じて、金澤に潛行した、急き心のお龍は、後にあやまつて、木谷のために物色され、警察の手に捕へられた。

鬼十時と内談して、人知れず、囚人を、芙蓉の館に捕へて、五太夫はこれを嘗てお妻をおとし入れた筈の中に檻禁したのである。

第一日に其の右の袖を裂き、第二日に其の左の袂を斷ち、第三日に其の帯を除いて、恚くして其の牲の、やがて來らんとする運命を前知して、いかに苦悶するやを見る事を以て、復仇の一手段としつつ、七日目の夜半、禁縛したまゝ、衣を奪うて、強ひて辱めて以て豫ての鬱憤を霽らさんとしたのであつた。

お龍の、唯如何にせば其の無禮のみを免るゝことを得るや、を尋ねた時、五太夫は得意鼻の上にあらはれて、然らば我等を呼ぶに父を以てせよ、といった。

お龍は言下に父といった。

然らば我れ娘と婚せん、馬の部、牛の部ぢや、といよく勝誇つて、凭れかゝつた時、お龍は、はじめて父母の膝下を離れたことを知つたのである。

今は是までなり、たゞあまりに見ぐるし、縛の繩を解いて、よき衣一かさね與へずやといふ、牡丹、虎の口に含まるゝ、宿業を斷念めた色を悟つて、巨山は綱を曳いた。

怒くて、お物師に命じて取り寄せさせた、小袖をかけて、扱帯を結んできり、とゞめると、お龍はサソクにパツと燈をくつがへした。

穿は、船底の如くに造られ、四壁暗澹として、あかりの洩れたは一枚の硝子窓を高く打つ浪の透間と、此の洋燈ばかりなのであつた。

炎は、油のとばかりを高く擧げた。

失望した巨山は、階子を上つて免れんとはせず、死してなほ相抱いた臭骸を留めんとて、虎の人立したる如く、追ふ。

火と油と煙の中を、お龍の裳はくるくるとまはつた、あはれ、其の最後の光景は、櫛の神の中に、畫像の如きものであつたか。

浪裡白跳健在矣。

其の炎の穿に満ちた時、硝子窓に、赤く火影の射したのを見て、折からお龍を探つて水底にあつた、河童は、窓を突破ると、瀧を落して眞白に躍り込んだ。

後日、此の湖のふちを、奇異なる一行の静々と通つたことがある。

一人は鸚鵡を据ゑ、一人は孔雀を捧げ、一人は羊を曳き、一人は鹿を連れた。蓋しこれ、いづれも都なる、アイ子、ウエ子、オカ子、キク子など貴夫人よりの使者であつた。

芙蓉館の焦土のあと、今や妙なる島となんぬ。楊柳枝低く垂るゝ處、紅雀飛び、岩高く苔の

滑なる處白鷺憩ひ、曉の霧に駒嘶き、夕暮の草に羊の群るゝをうかゞふべし。

たゞ市人の漕いで近くものある時は、其船立處に覆る、浪裡に白跳の怪あり、島に禽獸の女王あり。

人々の怒る消息は、近ごろ諸國を繪行脚する、お妻が夫、狩谷秀岳に因つて傳へらるゝ。

宿れば山寺の方丈に、老僧と膝を交へて、召さるれば富貴の前に、興來れば四辻の柳が許に、懷中繪の具、旅硯、不二太を描き、お龍を描き、力松、捨吉を描き、河童を描いて物語る、夜にあらざればせず。例として、さて灯を消して、暗中に筆を運らす奇技あり、須臾にして灯を點すれば、一個の麗人、紙上に寫し出されて、睫毛、黒髪の一毫亂れず、是怒の如く、渠が腦裡に印せられた、夫人美樹子の反映である、狩谷は心狂へる也。

紅雪錄

「旦那切符をお買ひ申しませう。」

「あゝ、何うぞ、と袂から財布を出して、外套の袖の下で、手を差入れて算へたが、然ももどかしさうに、突然、二等待合室の真中に二ツ並べた、大なる卓子の端へ、倒にざらりと明けると、十錢五錢二十錢銀貨五十錢、紙幣まじりに電燈の下へ燦爛として擴がつた、名古屋の停車場に於てである。渠は震ひつくやうに、胸を卓子に附着け、蔽ひかゝる姿で、片手でそゝつかしく勘定して、

「幾千だつたい。」

用を聞いた赤帽は、傍に小腰を屈め、

「貴客、何方まで、」

「新橋、」

「五圓十三錢でございます。」

「一、二、三、四、五圓と十三錢。」

と掴んで渡したのを、赤帽は黒い毛糸の手袋を嵌めた、大な掌に請けて、一度熟と見て、やがて出て行く。

停車場はがらんとして、夜の名古屋は眞白である。

客は小出しを財布に突込み、袂へ落とすと、二ツ三ツ肩を揺つて、雪の名残を邪険らしく拂つたが、四邊を胸し、つかくつと前面の暖爐の傍に寄つて、立つたまゝ手を翳し、吻と息を吐いて、焦茶の中折を被つた其の頭を垂れたが、敢て是は、火氣がなく、些の暖さの取れない處から、石炭の燃えて居るや否やを見むために、俯向いた譯ではない。

丁ど其時、先刻から一人此の暖爐の前の腰掛に、外套の襟を立て、帽子の鍔を耳に伏せて、蹲つて、火箸で突いたり、掌で煽いだり、息を長く吹いても見たり、兎さま角うさま試みても、火の揚らないのに飽倦んで居た男があつて、此の旅客の來てゐんだのを見ると、ござんなれ相談相手、待兼ねたといふ風に、勇んで、帽子を揺上げるやうに顔を出したが、別に言葉を懸けさうにもないから、

「何うしたんだ、變な暖爐だな、」

と呟いても、胸刺しも動かされた様子がない。で到底是は、石炭を燃すといふことに就いて、

何等の思慮も、分別も、知識も、経験も、方法も、傳説も、歴史も、勿論技術も持たぬ紳士である、と斷念めた顔色で、鐵火箸をぐわちやり、

「え、舌打をして腕を拱き、喟然として白塗の高い天井を仰いだ。

待合には唯二人のみ。

此處へ赤帽が其の紅を鮮明に、小倉の服の色の褪せたのも明らさまに、電燈に照されつつ、落着いて入つて來た。

「貴客、切符、」

「御苦勞」と受取つた、旅客は入口の方を忙しさうに見返つて、

「急行は十二時四分だね。」

二

「はい、未だ二十分ばかり間がございます。」

「未だ、二十分、待遠だな」と呟いた、けれども二十分は然したる長時間ではない、殊に此の人が待合室に入つてから、忙しく汽車賃を出して、慌しく歩行いて、急いで暖爐の傍へ寄つて、間もなく赤帽の手から切符を受取つたまで、ものの十分とはかゝるまい、案ずるに何か仔細あつて、

須臾も早く、名古屋の地を離れて去りたいのであらう。

其の清しい目も、優しい眉も、鼻筋の通つたのも、頬のふつくりとしたのも、停車場で慌て惑ひ、焦り、ふためくやうな容貌ではない、但其の色は、丑満近う誰も沈むよりは、より多く沈んで居る。

單に中折の帽子、外套だけの打見では、農も、工も、商も、武も、文もないのだけれども、松は風にも調べあり、梅は闇にも音信れて、此の人全幅の風采は、誰が目にも學校出の年少き紳士であつた。

「お荷物は、」

「彼だ。」

細い大島の、羽織の袖を開いて指す、二ツある入口の扉、右なる方に、一脚の腰かけがあつて、旅行鞆の中形なのが置いてある。

「お一個だけ。」

黙つて點頭く、と心得て會釋して、赤帽は直に踵を返した。

先刻から二人の話が途切れたら、直に、獨言して釣入れようと、頻に赤帽に目を注いだ暖爐の前の寒げな男は、恚う速に立去るのを捻向いて見送つたが、紳士の荷物の後へ、壁に背を凭せ、

腕組をして、向直つて立つた、赤帽の肥つた扁い浅黒い顔を、間遠に熟と、怨めしさう。
折から、どや／＼と入つて来た。

眞先に一名の陸軍士官、帽子の低いのを冠つた肥大な紳士、瘡せた細君、老人夫婦で十三ばかりの被布を被た、孫か、末子かと思えるのを連れ一組と、高等学校の制服を被た學生一人、此の七八人の人数に旅籠屋の女中、男衆が付き、見送人が交つて、待合の左右の入口から前後して繰込むと、直に八方へ入亂れ、すつと出て退るのもあり、斜に突切つて暖爐を指すがあり、荷物卓子の上に載せるのがある、意味もなくぐる／＼と廻るのがあるし、袖を拂ふのがある、下駄を鳴すのがある、靴を踏むのがある、反つて外套の袖を背後ざまに撥ねるかと思ふと、俯向いてコオトの裾を引張るのがある。

さて僅な待合の内にも、成りたけ足敷の少い近路を知つたらしく、別に三名の赤帽は角度を料つて、肩に、頭巾に、腰のひだに、ちら／＼と雪を蒙らぬはなき旅客の間を、赤き鞆の飛交ふが如く働いた。いづれも停車場居まはりの旅店から唯廣い庭一ツ越すばかり、發車の間に、待合に入つたらしい些少な距離を経て来たのでさへ、見る限り黒いものといへば、不殘其の形を留むる、雪は降頻つて居るのである。

又今停車場に着いたさうな、敷石の際にかたまつた下駄の音、コト／＼と響を交へて、町に降

り積ること約五寸なるを囁いて、此處に雪の浪の寄すると聞ゆ。

「旦那々々！」

と大聲に呼んで羅紗の筒袖を左右一杯に突張らせ、手首をすくめた、脊の圖抜けて高い、眉と目の間の伸びた、口の大な坊主の親仁。

素足に高足駄を穿いたがカラ／＼と叩を踏んで、陸軍士官の面前に不作法に突立つて、眞白な呼吸を吹き、大口を開けて、

「旦那々々。」

三

十二時に早や五分、今にも汽車が、と一同は身構へる、士官は左の腕を差伸べながら手袋を嵌め直して居た處。

「椿事でげす、旦那、汽車は参りません。」

「汽車が来ない、何うしてか。」

「はあ、雪で留つたのでございます。」

「雪で留つた、そりや、」といつて、斜に卓子に凭懸つて靴を投出して居た身體を眞直にして、室

内の人々を眇して唇に微笑を洩したのは、いで諸君、諸君と憂を俱にせむ、猛き武士の心優しき態度であつた。

「雪で、おや〜、」

「此の雪で、」

「然うかも知れない。」

「然うだらう。」

と口々にいひ交した、時も時なり、一人として此の新聞に耳を傾けないものはなかつたので、室内は残らず動揺み渡つた。彼の肥大なる老紳士にもなつた瘡ぎすな夫人の如きは、然も旅馴れた状に振舞つて、見送つて來たらしい、五十餘りの、是も古ぼけた羅紗の筒袖の襟を上げて、其癖咽喉も胸も鈕を懸けず、めりやすの股引、だらしない尻端折で、大形の蝙蝠傘を携へた、前齒の抜けた老僕に對して、恰も我が家の奥と表で一寸別る、やうに、軽く言葉を交しつあつたのさへ、二三歩、低い駒下駄で、つか〜進んで出て、誰にいふともなく、

「まあ……まあ何うも、」と呟いた。

氣の疾い學生は、其の眞偽を正さんとや、制服の裾を煽つて改札口へ駆け出した、靴音は長く響いたのである。

不殘、自個の齎し來つた警報の反響であるのを視て、坊主天窓は得意顔に、今度は其の所謂旦那なる武官のみならず、多人數を對手のつもり、調子はづれの聲を一層張り上げ、

「どうも豪い事でございますよ。何しろ貴官、江州の山の中で列車が埋りましたさうで、又彼處い等可恐い雪だと申しますな。いや最うしつきりはございません、此の降ります事な。當所でも珍しい大雪で、はい、飛んだ話でございます、雪に埋るなんて、何うも、は、は、は、と頰當したやうな古羅紗の襟が、天窓へすぼんと冠さりさうに、身を揺上げて高笑す。

士官は秀でたる眉を擧め、

「何のくらの遅れるか。」

坊主は突張つた筒袖の手首をぐしやり、同じやうに眉を擧め、

「其がさ、もし、何時間おくれますかな、何だつて此の汽車が雪籠に遭ふなんて、東海道はじまつて無い事でございますでな。何いたせ、十時に此處へ着きます筈のな、其さへ今の期参りませんで。」

「呀、然うか、」

「そりや大變だ。」

「驚きましたな。」

沈着なる士官よりも、先づ四邊に立つたのが、聲々に騒ぐのであつた。

「え、お寒うございますで、何なら最う一度、手前どもへお歸りの上、御休息なさりましては如何でございますませう。へい、いづれ發車いたします時分を見計ひまして、又お知らせ申しますで、へい。」

「いや、そんなに遅れやせまい」と同情ある士官は、自ら他をも慰めるが如き口振でいふ。

「だがもし、は、は、いづれ參るには參りませう。それに汽車の事でございますから、へい、けれども夜が明けますまでは、お待ちなさる譯にはなりませんまいで、へい、へい。」

ニヤ／＼笑ひかけてましく立てるのを、士官は黙つて聞いて居たが、フト言急に調子荒く、

「見て来い！」

恰も構内で鈴が鳴つた。

兩三人同音に、

「宿引め！」

四

鈴の音ぐわらん、ぐわらん。駈出して行く坊主の高足駄かた／＼／＼、カラコロカラ／＼

と忙しげな多人數の登音引續いて、廣濶なる停車場構内は、頃刻、顔と肩と褸と前後左右に入亂れた、汽車は正しく着いたのである。

此の時まで、黒き外套の見好げな品の好い後姿、冷き暖爐に手を翳して悄然として差俯向いた、以前の年少き一名の旅客は、當夜の一椿事を觸れ廻つた豫言者の坊主の來つた時も、唯少し、頭を上げて、上なる大時計を一目見たばかり、敢て振向きもしなかつたが、それか、あらぬか此の物音にはじめて此方に身を轉じて、徐ろに、入口間近な、彼の荷物を置いた腰掛に歩み寄れど、承はつた赤帽は依然として、壁に背を凭せたまま、腕拱いて突立り。

「君か。」

「私でございます。」

「今來たのは、」

「十時に此處へ着きます分が、三時間遅れて來ましたので。」

「急行は、」

「此のあとでございます。」

暖爐を搔抱いて蹲つた例の男も、此の汽車に迷つたさうで、

「や、どっこいしょ、」と懸聲して、欠伸とともに伸上つたが、此方に赤帽の語つたのを聞きつけ

て、動かす、中腰で見合せる。

「眞實でございますね、」

と瘠せた夫人が、眞先に、續いて、ごほくと咳きながら肥大紳士、士官も學生も入交つて、一度待合を出拂つたのが一なだれに、改札口に近い、戸の一方から引返して來た。

學生は肩にかけた提鞆の重いのを、はづして手に提げたが、卓子の上へドンと投げて、

「徹夜だ徹夜だ」といつて背後ざまに伸上つて、十二時既に三十分を過ぎた時計を視めながら、烈しく靴の爪尖を刻む。

爰に最も適當なる相談對手の出來たのは暖爐係で、渠は今おなじ腰掛の一方に少女を据ゑて、自分も又附添うた老婦人に對して、堪へに堪へた満腔の不平を漏しはじめた。

「どうも此の貴女、新橋などは、何時だつてこんな事はござんせん。冬向は貴女、これでなくつちや凌げませんのに、何うでございませう、此の體裁ツたらないぢやありませんか。函嶺を越しますと、何となく人間の氣が節儉になりますので、鐵道の人たちだつて何も自分達のものぢやなし、とうにも石炭を入れて焚けば宜いのでございませうがね。私はもう、先刻から怒うやつて始終せつちやうをして居りますけれど、火氣が失せて暖爐の裡が次第に黒くなつて來た中は、未だしも脈がありました。御覽じろ、これ、段々白くなつたのは心細いぢやありませんか。何もこれ、

汽車が江州で埋まつたつて、暖爐の中へ雪が降るといふわけぢやなし、はあ、はあ、石炭がなくなつたんです。」

老婦人は火を求めて一服つけたが、灰だらけになつた女煙管を、空しく懷紙で、くるくと捲いて拭ひつつ、

「此のお寒いのに、石炭がないのでございませうかい。」

暖爐係は頸を窄めて、彼の耳まで被さつた帽子の裡で低聲になり、

「其が貴女、否、あるにやありますよ。それ、向うの卓子の下を御覽じまし、あれ、ブリツキの箱に入れて、鐵の十能までつけてさ、黒砂糖の接待といふ鹽梅式、石炭にあぶらがかつて、然も旨さうにきら／＼光つて居りませう。」背後に、老婦人が振返るに連れ椅子に凭りかゝつて立ちながら、少女の身を庇うて居た同伴の老紳士も、齊しく石炭の箱の、暗き中に電燈の光を浴びて、幽に輝くのを眺め窺ひ、

「焚いては不可いのでございませうか。」

「其處でございます、どうもソレ官有物でありますから、私どもが、濫に手をつけますわけには参りません。」

「もし貴女、僅な事で大した違ひでございますこと、暖爐が消えましたのでございますか。」
傍から聲を懸けたのは瘦せたる貴夫人。

此の女性は、先刻から見送の、例の前はだけの老僕を歸すことに忙くつて、暖爐の事などにはかゝづらつて居る暇がなかつた。

先づ其の吾妻コオトの袖口をキチンと胸で合せて、其處へ手を組んで、拇指をかさねて乳の邊へ附着けるのをキツカケに、根上りに結びつめた夜會結の項を伸べて、少し俯向き氣味になるとともに、(ねえ、お前、)と呼びかけて、扱て、御苦勞であつたこと、歸つたら宜しくいふこと、わざ／＼見送つてくれた其の深切を謝すこと、停車場まで来ただけで厚意のほどは届いて居ること、別段に荷物もない事、遅いこと、夜が更けた事、路が悪いこと、雪が積つて居ることを、細く一呼吸に順序正しくいつて、其の老體であることを最後に、御苦勞であつたを最初に、最う歸つてくれといふのであるが、これは待合に入ると直に取掛り、凡そ八九度といふもの繰返された。口上一順するとともに肥大紳士を一寸見て、
(貴下、)といふ。

づんぐりした聲で、

(あゝ、もう歸つて宜しい、歸つて宜しい)とたゞそれだけをいふのであるが、いかにも取つて着けたやうに大儀らしく、口重い。多人數の中に、此の人ほど無口なのはなく、又其の細君ほど口數の多いのはなかつた。

今も今とて、此の度は、扱て——御苦勞から——其の——老體——をいつたあとへ、恚ういふわけで何時汽車が來るか、夜が明けけるか、其さへ知れぬ。道中は不慮の出來事が多いもの、嘗て伊勢を旅行した時、外宮から二見ヶ浦へ廻る途中で、雇つた俵が前へのめつてあはや五十鈴川へ倒に落ちようとしたが、危く車夫の肩につかまつて無難であつた話を、おくれ毛を震はしながら同一の姿勢を亂さず、細やかに物語つて、それから見ると汽車の後れるなどは間々ある習。

(貴下、)

(あゝ、歸つて宜しい、歸つて宜しい。)

然うすると又前はだけの態度といふのが、ひしやげた帽子で續けツさまにお辭儀をして、次手に其の裾を掻合せると、やがて、仰向いて、ニヤリ／＼と笑つて、果は目を瞑つて、どう仕り、さういひ終ると口を閉ぢる。其處で又裾が開く、一度は一度より次第に、めりやすの股引の股まで顯れるのが紋切形。

あぐね果てて、此の時、人を轉して暖爐の方へ口を入れたわけで。

「はじめから威勢よく燃えては居りませんやうでございましてすがね、それでも赤いもの見え
ました中は、何となく未だ凌ぎ可いやうでございましてすが、どうも堪りませんこと。」コオト
の肩をしめて、益々袖口を引合せる。

ぐわさり、する／＼と引出した石炭箱を引立てて、慣然と暖爐の前へ投下したのは學生である。
「構ひませんよ。何有、構ふもんか。」

と山装、十能をすばと突込んだ、例の男が未練らしく紺足袋を穿いた足を、冷たい鐵に押つけて
居たのを引込ませると同時に、プス／＼と陽炎の薄煙。

あれだけ火がないのかと、一同いひ合せたやうに悚然とした。

「來ました。難有い」と、例の男、直に火箸を取る。

これを小耳に挟んだ商人風の山高帽。

「辻占が可うございませぬ、最う参りませう。」

同一風俗の一人が、

「いづれ追ッつけ参りませうが、しかし私は一時間や二時間、汽車の遅れましたのは致し方ない
として、前途が心配でなりません、函嶺は無事でありませうか。」

答へて、

「然れば何とも申されませぬ、尾州参州は安心でございませぬ。私もな、何うも其邊を案じるので
ございませぬ。」藍關より來るべき汽車を待ちつつ、秦嶺の嶮を説くなりけり。

若い紳士は、並んだ赤帽にすら語もかはさないでゐんだが、愁然として再び時計を望んだ。一
時半。

六

何爲か暖爐の火が燃えぬ、突く、叩く、こじるなど、あらゆる手段で揉みただけでも、僅に煙
の濃くなつたばかり、炎は絲ほどに縫れても閃めかないので、例の男は止むことを得ず、再度火
箸を投出して歎息した。

「こりや壊れて居るんです、から、だらしがありませんや。雪で煙出しでも狂ひましたか知らん、
こんな事といふのがあるわけのものぢやございませぬ。」

少女は裾の燃え立つやうな、友染縮緬の羽織を着て、美しい毛絲の襟巻、さげ髪にリボンの飾、
拵へたやうな蝦茶色の袴を穿いた蕨つけた兒であつた。

頸を襟にすりつけて、うつとりした可愛い聲で、

「眠いよう、眠いよう、」

「まあ、可哀相に、もう些と我慢をおしよ。」と情ない聲ですかしながら、老婦人は其の時まで手傳つて煽いで居た、一折の懐紙を詮方なげに袂へ入れる。

背後から老紳士、

「寝ると風邪を引くで、辛抱せよ、佳い兒ぢやの、佳い兒ぢやの。」
瘦せた貴夫人何條これを見て黙して止むべき。

「お孫様で在らつしやいますか、まあ、お美しい、嘸おねむでございませうねえ。」

「はい、末ツ子でござんして、いゝえ明けまして十三になりましたが、孩兒で仕様がございませう、はい、否、静岡の些と手前で下ります。こんな事と存じましたら、今夜は逗留をいたしませうものを、此の汽車で歸りますやうに、宅へ電報をかけましたから、皆停車場で待つて居りませう。はい、此の娘の兄や、貴女、姉どもでござんして、何事とは存じませんから、路で又どんな間違ひでもありませんかと、大抵心配をいたして居りませう。些とでも疾く貴女。」

今更此地に泊るわけにも参りませんし、然うかと申して、迎も今夜は歸るまいなぞと存じて、皆が宅へ引取りますと、其も難儀なのでございましてね。

宅から持つて来た車が居りませんと、こんな遅く、どうすることも出来ません。雪道を貴女、

これを連れまして小半路歩行かねばなりません。」

「私歩行のは厭よ、母ちゃん。」と泣聲になつて少女は頻に頸を動かす、母の老婦人も涙ぐんで、

「お前そんなことをいつたつて仕様がありません。はい、はい、否、學校のお休みに伊勢様へ詣りましてねえ、おもしろかつたね、いゝことをおしだけれど、後が悪くつて困りましたねえ。」と、頬ずりして顔に顔。

待合の同情は、不殘此の母子に集つて、慰むるもの勵すもの、騒然となつて、暖爐は冷いまで

も、一時電燈は燈と其の光を増したが、やがて其の反動は著く、氣の滅入るばかり寂然とした。

交り合つた人々の會話は、途切れ途切れ、一組づゝ一組づゝになつたと思ふと、稍絶え稍絶えて、やがて細語となり獨言となつて、果は一言も發する者さへなくなつた。

少女は老婦人の腕に突伏した、例の男は暖爐の上に、やけに腕をついて打傾いた。士官と學生

とは左右から卓子の上へ半身を乗出して、國民と讀賣とを打視むる。傍に二個の商人は、すねた

やうに、背中合せになつて、氷りついて、一は西の方藍關の汽車を待ち、他は東の方秦嶺の嶮を

想へり。めりやすの股引は、あらゆる徒然と退屈を吸ひ盡すばかり、口と股を押開いて、壁際に

仰様。少し放れて肥大紳士と、押並んで腰かけて、瘦せた貴夫人は、姿勢を正しく、即ち胸尖

に指を組んだが、其のコオトの色も顔の色も、ものの幻の消え際かと茫乎として、電燈も且つ白

け渡つた。

愆くして莊嚴なる此の名古屋の停車場も、雄大なる雪の中に、唯偏に孤驛の掘立小屋、屋根あり柱ある建物に過ぎざるのみ。

七

更に長方形の入口の扉の中に描かれたる、室外の光景を透かし見れば、あはれ、果敢い風情であつた。

人々は唯まばらに黒く淡き土間の上に、斑々として、吹きつくる風にはらくと白き激は、岩に碎くる潮に似て、尾張國を押し浸した雪の大浪の退いたあと、散々に名残の海松布を撒き散らした趣あり、彼處にも又小さな暖爐を取巻いて、二重三重に輪を造つたが、筵の繩の斷れたる如く、横倒れになつたるあり、俯伏になつたるあり、つんのめつたかと思ふあり、行倒れの如きもあり、赤毛布に萆蔭を交へ、風呂敷に頭巾を並べて、夜氣沈々、地の底に、あらゆる構内の光明を引き込む時、壁の色灰に似て朦朧として見えたるありさま、荒海なる難破船の、釘の残つた一室に、幾百年の昔より、底の藻屑に影を留めて、世を終るまで怨靈の消えざる姿に異なるなく、時として遙に薄ら蒼き火の暖爐を透きて見えるのも、此等の執念を啓みて、魔王が船幽靈に與ふといふ、

呪の炎かと物凄い。

然れば硝子の窓越の、停車場前なる廣場も、白き海の動くに似て、二層三層の高樓に、ちらちらと、電燈の沈んだ色の揺ふさへ、暗夜の潮の輝く風情、空恐しく寂寞として、唯聲は風、音は雪、ものの氣勢は寒さであつた。

時に彼の少き旅客は、低し、といふよりも、寧ろそれよりは發し得ないやうな沈んだ調子で、「君、君」と二聲呼んだ。赤帽は舊の如く腕を拱いて壁に描かれた姿で突立つて、稍頭を下げて居た、離れたものには居睡をすると思えよう。但突出でた廂の下に、黄色を帯びた一雙の眼は、怪しき星の光を帯びて、圓かに開いて居たので、重い口ながら速に應じた。

「はい、」

少い旅客も、恐らく渠を眠つて居ると思つたのであらう、餘り器用に返事をされて、はツと出後れたか、少時して、

「何は、酒は買つて貰へまいか。」

「は、」

「酒さ、」

「御酒でございますか。」

「何處か、其處等に賣つちや居らんか。」と然も人聞を憚るらしい。

「え、構内の出商人は皆引いて了ひましたですが、未だ起きて居れば、停車場前の旅籠屋にはございませう。」と是も心得たらしく密にいふ。

「禮をする、君でなくつても誰か目着けて、一ツ御苦勞を願ひたいんだ、お頼みだが、」といった顔の色、以前より猶蒼う、

「是で、何うか、」

衝と手に渡した一枚の紙幣は、豫め懐手の袂に取出して居たのらしい。

「何のくらの買ひますか。」

「大なのを二本ばかり。」

「嬾詰で、四合入の、はい、宜しうございます。」

と驟然、壁から放れたが、身體を廻らして出ようとして、フトしんせつに心付いたと見えて、入口の扉を入交りにハタと閉めようとする。

擦れ違ひに、すつと入つて来た婦人がある。

黒綾のコオトを着て、藍鼠縮緬の頭巾を、被らず、ト緩く頸に巻つけた、生際の濃い、揉上げの深い色ツぽい、ふさ〜とあるのを堆い銀杏返、ぱつちりした黒目勝に、一寸嶮、伏目勝で然

うとは見えず、色の飽くまで白い、圓顔ではないが細面といふでもない、肩も腰も小ぶとりな中年増。

口は唯美しい飾だけにつけたやう、ものはいふまじい狀に固く唇を結んで、澄ましてツンとして反身なり。

八

續いて白い手巾を襟にかけた、薄命らしい小女が、兩手に、大な風呂敷包と革鞆を提げて、ちよこ〜とお供で入る。

あとをドン、赤帽の姿は消える。

扱て長者町あたりと見えた、此の兩女は、齊しく十二時以前から待草臥れる連中であるが、雪に最も近い構内の入口の腰掛を、二人で占めて、氷りついた風情で居た。

惟ふにお納屋の中二階、將たそれ河文の奥座敷にあらざるよりは、漫りに洩らすまじき嬌音を、うっかり知人に聞かすまじく、故らに遠ざかつて居たのであらう。否、此の待合室に旦那云々、説をなすものあらむか、未だ孰か是なるを不知。

今赤帽が扉をさ、むとしたので、餘りに三等の待合の、船幽靈の如き物凄さに堪へかねて、こ

ここに其婀娜たる姿を顯したに相違ない。
直に年少な旅客の居る、端近な件の椅子に背後向きになつて腰をかけた、間へ持參の荷物を入れて、小女は傍に悄然。

定に入つた如き前面の隅なる、瘦せた貴夫人の、一寸顔を上げて、此方に打撃んだ眉を向けたばかり、敢て一人として目を着けようとするものはなかつた。

實際、此の待合室は、爾き尤物を求むるより、列車を欲するに急なのである。

ぎいと扉が、赤帽を附着けて、ばたんと閉まつた。

折角の人の頼、無にならないのを嬉しさに、しかんだ面に笑を湛へて、人には藏すものやう、上衣を開いて脇の下に忍ばして來た、二本の襷を密と出して、

「へ、へ、へ、」

「どうも御苦勞、」といつて旅客は何故か深い歎息。

「旦那、お剩錢を、」

「そりや可いよ、可いよ、可いんだよ。」

「え……何うも、」

軽く一寸掌を上げて頂いたが、其のまゝ、衣兜へ突込んで、片手も入れて、赤帽はぎろりと四

邊を眇した。

心付いたか、慌しく、

「汽車は、關ヶ原で埋りました。急いでぐんぐん推して參りました爲に、機關車の前へ、どえらい雪の山が持上つたと申しますな。何でも十二時四分に出ます、急行の切符を四五枚切りました處へ、電報が參つたさうで、此の停車場が出來ましてからはじめてなんで、はい。だが、旦那、先刻着きました此處までの列車も無事に參りましたし、様子が知れると直に迎の機關車と、工夫が大勢加勢に出ましたさうです、皆でえつさと引張つて參ります。遅れるたつて然う大した事もございますまい。え、其の御酒、荷物へお入れ申しませうか。」

「い、や、」

といつたが、自分で革靴の口を開けて、差覗いて取り出した、四角な紙製の小箱一個、ぴりぴりと真中を裂くと、猪口が花片の牡丹形。

「戸外は未だ降つてるか。」

「どんく、どんく、」

「大雪だな、といひく、器械の口を外して、斜に取る、襷に進歩といふ銘あり。

寒さに手が震へたか能く注げず、烈しく傾いて唯僅に底に滴つたのを、ぐいと引かけ、又注い

で、呷つて、ぐい。

衝と身を起して、例の澄まして、美人は小刻に此腰かけをツンと離れた、同席御免といふ如し。酒を厭ふと悟つたか、後姿をじろりと見て、屹と其の眉を蹙めたが、杯を礎と下へ、四合入を倒にして、仰いで目を瞑つて半ばを一息。

もぎ離すやうに口を取つて、トンと其の進歩の底を外套の袖に支くと、吻と息を吐いたが、早や、目瞼に颯と漲る血の色。

低聲で呼んで、

「赤帽君、どうだ君。」

九

呼ばれて赤帽は其の鼻にも似た鋭い目を細うしたが、酒の香を嗅ぐや否や、實はあらぬ方を見て居たのであつた。

「寒くつて寒くつて、堪らないぢやないか、君も一杯やれ。」

と破り棄てた包紙の端で、罎の口をきり、と拭いて、其ま、赤帽に差向けた。

「ぐツと引かけ給へ。」

「難有うございます、まあ、貴客、あがりまし、」

「可いよ、澤山あるよ、さあ、君、」

「では其のお杯で下さいまし、其の方が結構でございます。」と然るく嬉しさうに手を出した。直に獻して、

「成程然うか、ちや、是で。」

酌は身體を捻向けて手が逆になつたので、だぶくと出て、掌に溢れたので、固くなつて受けたる赤帽、慌しく右の手で持ちかへると、唇に衝へて喰ひ切るばかりに手袋を外すや否や、未だ雫の留まぬ猪口の下へ重手をしたが、ちツと受けて、我慢して、やがて、べろり横撫に嘗めた時、酒浸りの其の手袋は齒を放れてほろりと落ちた。

構はず赤帽の廂を、彼是旅客の肩と摺れ、に、近く見れば硬い薄髻の生えた顔を、猪口の上へ持つて来て、直角に腰を突出して曲げたが、ちゆツと吸つて舌鼓、タツタツ。

「へい、貴客へ。」

「まあ、お壓へだ。」

「で……ですかな。」

「追つかけて最う一杯。否、未だ、構はず。」

五杯目をぐくりと飲んで、漸々と腰を伸して、短胴の下へメめ込んだ、三尺の下あたりへ、重いもののやうに飲みさしを据ゑて持つ。

「何うだ、おもしろい事でもないか、」

旅客は此時ふらくとして、腕を腰かけの手に曲げて、頬を支へ、仰向いて、赤帽の顔を見上げて打傾いた。

赤帽は庇の下で、額暗く伏目になり、

「おもしろいは旦那方こそ、當地へ新年の御旅行でございませうか、」

「何、然ういふわけでもない、」

「何時おいでになつたのでございませう。」

「昨日の朝さ。」

「東京から、」

「あゝ、然うだよ。」

「それは大分御遠方から、又強いお急ぎでございませうな。」

「詰らんもの、」と投げたやうに落膽した風していふ。

「そりや、最う一向詰りません、別に見るやうな處はありません、名所も景色もございませぬの

で。」

「否、なか／＼然うぢやないよ、前津も佳し、大池も佳し、此の電車の通る正面にすっきり記念碑の立つた處なんぞ、西洋へでも行つたやうだ、田舎漢は目を驚かす。それに紫川といふ名所があるぢやないか、第一君たちの名所だらう。」

「御串戯おつしやいませ、私どもは何、それよりか、今度建立になります、納骨堂の方が、難有い名所なんで、はい。」

何でも信濃の善光寺より、もつと立派な普請ださうで、去年の夏からかゝつて居りますが、大した地形でございませう。まあ其でも出来ましたら、精々通ひませうと存じまして、あくせく働いて居りますんで。

何の旦那、紫川なんて、名所どころか、金銀を棄てる溝でございませう。」

と赤帽は苦笑。

「嘘を吐け、もつと飲んで、些と其の泥を吐かないか、」と此方も微笑んで囁き取る。

赤帽は時に四邊を見たが、人は唯昏昏として、灰の如く、煙の如く、一の色濃き影もあらず。却つて柳行李、支那革靴、風呂敷包など、算を亂したのが、むく／＼と動き出しつつ、人語を發すらむ氣勢である。

憚らず杯を上げて、残れるを飲み干した。其を返さうとして猶豫つて、つまさぐつて、俯向いて熟と視めたが、

「此のお猪口は、旦那、牡丹亭でございますな。」

十

「え、餛飩の煮込が、彼處は名物でございますまして、火鉢ごと座敷へ持出して喰はせますが、閑静な佳い處でございます。牡丹亭へおいでなさいましたのでございますか。」

「あ、牡丹亭へも行つた、紫川へも嵌つたさ、と酒がいはすか、明さまに語つたが、聲は沈んで居た。」

其處で赤帽が心安げに、

「失禮ですが、お杯を差上げませう、へ、へ、其はお楽しみでございます。」

「何、」

と受けると赤帽が酌をする、旨さうに一口飲み、

「私ぢやない、朋友さ、同伴さ、飛んでもない馬鹿な奴さ、好色な奴さ、な、しかし羨しい男さ。」

「へい、お同伴様で、」

些と要領を得ないで赤帽は眞面目である。

「長々と川一條や雪の原、嘸其の水は紫で、廓の灯は美しからう、こゝへ千之助が旅姿で通ふのか。」

「千之助様とおつしやいますと、」

「千の字さ、私の其の朋友さ。深見といつてね、兎角深みへ嵌りたがる男だ、又其の溝へでも墮ちなければ可い。」と半ばは獨言のやうにいつた。

「お一人行らしたんでは危険でございます、一所に行つてお上げなされば可うございました。だが旦那、然うすると婦人の兒が喜びますかはりに、恚うやつて結構な御酒を頂くわけには参りませんので。」

「お世辭もんだな、さあ、又上げよう、しかし君、男の酌では詰るまい。」

「どういたしまして、え、少しわけがございまして、婦人なんぞ人間とは思ひません。」

「いやお互にな、」

といつて呵々と笑つたが、夜陰なり、折から片隅の一際薄暗い中に、此の聲は凄かつた。

「なんぞといふが、其の實は人間以上かも知れないよ、人は知らず私には事實然うだ、ねえ、赤帽君。」

「へい？」

「人間以上か、以下か、何うだか知らないけれど、何しろ名古屋の婦人は酒を嫌ふと見えるな。」
旅客は突然、妙なことを。

赤帽は何かは知らず、

「然うとも限りはしますまいで、一體に餘り酒の好きな婦人といふのはございませぬ。」

「特に名古屋が甚しい、見給へ、此處に居た美人なんざ、酒をはじめるや否や遁げました。」

と大分酔が廻つて來た、勿論一息に約二合を呷つたのであるから。

對手も以ての外可い機嫌で、

「成程御尤でございますな。」

「激しいのは、人の飲むのを見てさへ三舍を避ける、杯を獻したら駈落をして、酒を飲ませたら目を眩すたらう、實は其の深見千之助といふ男も、此の名古屋へ酒を飲まうと思つて出掛けて來たのさ。」

「何處かお氣に入つた料理屋がございますので、」

「否、飲ませて貰はうといふのだ、酒を強請りに來たんだね。」

「へい、」

「其の強請らうといふ對手は、當地の高等官の細君でね、所謂當世の貴夫人さ。多分名をいつたら君なども知つて居よう、地方は廣くつても狭いから、彼が誰某の夫人といつて指を折れば直に分る、名代の派手で、殊に無類の美人だから。」

「え、成程、其のお方へ、千之助さんとおつしやるのが、酒の無心に入らしつたんで、旦那、

條が悪うございますな。」

「聞きやうも悪いんだ、何も銀の平打の簪や、金時繪の櫛を證據に、坐り込まうといふのぢやない、貴夫人といふのはね、其の千の字の姉さんなんだよ。」

十一

「兩親のない男だから、姉は姉で勿論だけれど、母親とも、父親とも、兄とも、叔母とも思つて、懐しがら、慕ふ、甘える、可恐しがら騒ぎなんです。其姉に、去年手厳く禁酒を命ぜられたと思ひ給へ。矢張新年、此の名古屋へ來た時の事で、弟は東京に住んで、姉は、かたづいた先の主人が當地へ勤めるので、來て居るんだが、久しぶりで逢つたんだ。殊に一學校も卒業して、まあまあ榮譽を擔つて來たといつても可い、唯二人の姉弟です。夫人の方でも懐かしい、慕はしい、甘やかしたい、又叱つても見たい男の兒だから、逗留をして居る中は、彼處、此處と連れて歩行く、

朝ツから御馳走して、寝る間も惜しいくらゐに騒いださうさ。其のうち又夫人の知己の令嬢なんか、女連三四人で、千の字と一所に、前津の田圃をぶら／＼歩行で、皆それ指環ね、時計ね、金剛石、紅寶石、眞珠、黄金、珊瑚、白襟やら、友染やら、裾模様、江戸褌、といふ扮装。畦の稲塚の跡だの、大根の枯葉などをおもしろさうに、田舎道の丸木橋を恐怖がつたり、手を曳いたり、泥濘を這つて、鼻紙を使ふのもあれば、向うで手巾をふるのもあつて、さゞんざで此の一行が牡丹亭へ練込んだ時。

母屋とは立離れた亭づくりの六疊か何かへ、色と香を充滿に陣取つて、一寸一口といふ處だが、女連、殊に其の姉さんは、千之助の些少も左が利かないのを知つてゐるから、お銚子拔で、といふ誂になると、件の千の字此處で堪らなくなつて、事露顯に及んだといふのは、是非お燗の暑いのをと註文をしたんださうな。

尤も姉さんの知つて居る千之助は飲まなかつた、けれども最う大學を卒業しようといふ間際から、些と仔細あつて飲みはじめた、なか／＼の酒家なんだ。」

赤帽は酌をしながら、
「いづれ、お仕込みでございませう。」
「馬鹿をいへ、私が仕込まれた位なものだ。」

(生意氣だね)か何かで仔細なく許可が出て、直に杯洗がちり／＼、凡て、まぶし、茶碗蒸、お鮓に、奈良漬、甘いものは、むしかん、外郎の類に至るまで、辛いといへば唐辛子にもかつゝ居た處だから、ぐいのみに三四合また／＼、口を喇叭にして、けるのを眺めて、呆れ返つて居るのを、

(姉さん)などといふと、此の聲の懸けやうが、魔性のものを呼ぶやうだつて交ぜ返した、人の悪い令嬢があつて、姉、申戯半分に不機嫌不斜

(私が困るわ)と苦々しがつて居た中は未だ可かつたさうだツけ
其の勢でふら／＼と出た、暮方だつたつてな、酔顔朦朧として眞赤だから、姉さんが、

(恥ツかきねえ、同行は恐れる。)
とそれでも莞爾していふと、

(其方で頭巾を被れば可い)なんのつて大氣焔。
道が變つたから、あの大池のふちを通つた、黄昏なり、遠くでちら／＼と灯は點く、はじめて

だから大な湖と見えたらう、困つた千の字は、龍宮の入口でも見つけたやうに、好い景色だつちや、ふら／＼水際へのめるから、

(貴下、危いことよ)ツていふのがあると、姉さんは邪険な辭に、優しく眉を顰めながら、

(うつちやつてお置きなさい。)

(誰か對手はありませんか、直に心中だ。)と先生大生酔。

色気かと思ふと、袂から、茶屋で攫つて來た、ゆで玉子を出して囙ります。

是で最う當分勸當の價値十分だから、姉さんは貴婦人式の圓鬘、脊が高くなるほどツンとして
すん／＼、前へ行くあとから、よろ／＼と道を綾にかけて歩行いたが、一軒屋の手前に、
路傍の明地の端へ、夕風で焚火がしてあつた。

ちよろ／＼炎の上つてるのを、とろりと見つけて、何處迄意地が汚いのか、止せば可いのに。」

「はて、へい。」

と赤帽は猪口を差控へる。

十二

「深見が巻煙草を出すと、突然口へ銜へて、蹠跟けながら點けようとすると、僅なことも恩愛で、
蟲が知らせるとでもいふ事か。澄して前へ立つた姉さんが、其時フト振返つて、

(あ、危い)といったが間に合はず、無精にも程のあつた、懐手をしたま、口で吸つけようと
したから、ぐら／＼となつて、焚火の上へ横倒につんのめつた。」

赤帽は思はず口へ出して、

「え、危い。」

「そら、懐手だから足搔がつかない、其のま、炎を嘗めさうに、ぐた／＼となつたが、あ、あ、
と皆いつたツ切。

夫人が顔の色をかへて飛んで來て、地へ膝をつくと、友染の長襦袢が泥塗れになるのも構はず、
一心になつて抱起したが、片袖宛で火さ。

自分でも紫紺の縮緬の襟巻や、江戸褌の彼處此處焦して構はず、揉消す處へ皆寄つて始末はつ
けたが、直に腕車で愛知病院へ駈込むといふ騒ぎぢやないか。

左の二の腕から大火傷、今でも痕は消えないが、まるでこれから、
といつて旅客は袖をか、げて見せた、其の露したのは右の腕で。

「ずつとこれへかけて朱で刺繡をしたやうに、俱利伽羅紋々の龍の形、可恐しい極印を打つた、
其の千之助の手を取つて夫人が自分は涙ながら、じり／＼とあぶらを絞らせて、此處できつぱり
と禁酒の申渡。

尤もそんなにかたまるまでに、いかに親身とはいひながら、其の優しい介抱といふものは、怪
我人より夫人の方が、いた／＼しいまで瘦せたくらる。

此處で一言もなく恐れ入つて、男らしく立派に誓つた。

(決して酒はのみません。)

「恚ういふわけで酒を斷つたが、東京へ歸つてから、又感心に、一滴嘗めても見ないといふ大勇猛な精進さ、まあ、ざつと一年間。」

赤帽は取つておきの手の猪口を、つくぐと見てうつむきながら、然も感に堪へた趣で、

「御酒をおやめなすつた其のお方も感心でございますが、留めさせた其の御夫人は猶豪うございませぬ。眞心が通じませんでは、然うは爲せられぬでございますに。え、たとひ親身の姉様にした處で、今時そんな優しい婦人がありませうか、いづれ極昔風なお嬢様で、女學校などいふものは、門をお潜りなすつたこともないお人でございませうですな。」

と思ひ入つた様子で聞いたが、目は輝くのであつた。

旅客は何とも心づかず、

「どうして東京で有名な學校出のぱりくだ、縦の字も讀むし横の字もすらく讀む、馬や自轉車は知らないが、ぶらんこにも乗つたらう、荒き風處ぢやない、テニスの球に迄當つた人だよ。」

「へい、袴を穿いた夥間にもそんなのがありますか、へい、」

「いつたが心ありげな、あとの言を酒で壓へて、赤帽はぐつと飲んだ。

「は、は、處が不可い。」

「はて、留められませんか、と彼方も色に出て眞赤に笑つた、齒が白い。

「其處で酒を強情りに來たのさ。」

「なるほど、」

「其の姉さんに、」

「へい、なるほど。」

「いかに飲みたければといつて、一旦斷ちますと誓つたものが、對手が金比羅様でなくつたつて、むざ／＼飲まれるものではない。

何、さきは婦人だ、しかも姉だ、また東京で酒を飲むのが名古屋まで知れるものか、知れたつて小兒ぢやなし、一人前の男だと、いつて了へばそれまでだが、其處は義理だ、情愛といふもんです、」

といひかけて悄然とした。

「そんならまたそれほど義理情愛をわきまへたら、黙つて禁酒をして居れば可いやうなわけになるが、其が不可い、といふのは、赤帽君、君は何故か十年の知己のやうな気がしてならん、こんな場合であるからかも知れないが、私は然うではないやうだ。」

「私も貴客、何となく、へい、飛んだ無躰でございます。」

「あ、私の知己なら、千之助にも又知己だ。朋友のために、まあ、聞いてくれ給へ。」

元來ね、其の深見が酒をはじめたそも、何も好や道樂ではないんです。私なぞが見ても、止むを得ず酒にしたのだ、詰り薬なんだ。

奴は其の豫て生命がけで戀つて居た婦人があつた、思つて遂げざる戀で、其のものは他家へ縁づいてしまつたんだ。」

赤帽の眼は又ざろりとして、黄を帯びて輝いたが、人知れず一種異様なものであつた。若し一目是を見たら、いかに酒が言はするにせよ、必ず其の物語を中止したであらう、けれども赤帽には庇があつた、庇は人に暗かつた。

「縁づいて了つたんだと、唯口でいへばそれだけの事だけれど、若い當人の身に取つちや、身體

がしびれて血の色が變るくらゐ、それからといふものは、酒を飲まないで、千之助、顔に活きた色のある事はなかつたんだね。

是だもの、いかに義理だつて、情愛だつて、姉さんの一言で酒を斷つたのは容易なわけぢやない、こりや私なぞには出来ない。

けれども又、情愛で飲みはじめた酒だから、同じ情愛で斷つことが出来たんです。

一體飲む中も、止めてからも、心が狂ふほど、情ない思ひをしながら、其處は教育のある男たから、やけを起すなぞといふ不心得な事は微塵もなく、蔭ながら其の餘所へ縁づいた、戀人の無事を祈り、幸福なやうにと希つて、舅姑の氣質やなんか、實家の親たちより恐らく一倍だらうと思ふほど、氣を揉んでさ。いや、其の初産のおめでたさを、風の音信に聞いて、朋友の醫學生に、西洋産婆と、取揚の優劣を、内證で聞く如きに到つては、馬鹿々々しいが、心は清い。

然して其の男の心持といふのは、何時か、何年の後か、或は何十年経つてか、そりや知れないけれど、先方が白髪になり、自分も齒が抜けて、誰が目にも色氣のなくなつた時か、もし然までに待たないでも、自分も斷念めて他の女を女房に持てるやうになるか、或は一朝豁然として大悟徹底をしてだ、女に對して心の動かないやうな見留がついたら、其の時こそ戀人の手を公に握つて、御亭主の前、親類の前、知己の前で、一度自分が、どれほどに思つて居たかを、其の婦人に

打明けて、薩張笑つて退けようといふのだつた。

何故なら年は若し、思ふの慕ふのといふ事なんぞは、天下の一大事と心得て居たのだから、情なく傍へ縁附かれるまで一度も素振にさへ、先方へ心を通じたことがなかつたさうで、又それだけに心は深いんだものね、死ぬまで黙つて居るのは餘り情ないといふわけなんです。」と聲もしめやかにいふのである。

赤帽の顔の色は、やゝ解けて、

「それでは約束をして置きながら、寝返りを打つたといふわけではございませんな。」

「眞個さ。」

「へい、それならば未だしもでございますがね、もしか寝返を打つた阿魔なら、活かしては置けませんで。」と、可恐しい世辭をいつて、又杯を傾けながら、

「貴客、心がはりなら女學生でございませうが、何にも知らんのでは大した薄情な女といふではありませんで、薄情な女でなければ、大方蝦茶袴は穿いた事のない人でございませう。」

「可恐しく蝦茶に祟る、意恨でもあるか、

と不圖耳に立つてうら問うたが、

「へ、何、然ういふわけでもございませんで。」

「然うか、いや然し違つたよ。千の字の其の叶はなかつた戀人といふのは、矢張姉さんなる夫人の學校朋達で、しかも容色が佳いので、兩方惚れ合つて姉妹同様、婦人同志で悋氣をしたといふくらゐなんだ。」

十四

「だから千之助の姉さんといふのも、大に其の間の弟の情を知つて居るから、同じ酒の意見にも、特別の意味が籠つて、實に涙があつたんだね。其處で、其まんま禁酒して、其の氣で辛抱をすれば、何事もなかつたのを、急に我慢が出来なくなつて、東京から酒を強請りに来たといふものは、何うです、去年の秋、其の戀人が、産後で果敢なくなつたぢやないか。勿論、華奢でね、どうせ、はじめツから兒を産まうなどは無理なんだ、無理だつて、しかし、こればかりは仕方がない。」

仕方がないのに、斷念められないのは、千の字で、唯一心に、そら、今の其の機會を待つて、一度思つただけを打明けようと、卑屈なやうだが因縁さ。そればかりを樂みに、當にして居た、其の美しい的に、ほろりと消えられては、急に闇、國も處も知らず名もない山の中に、眞暗な道を踏迷つて、唯便りにした綺麗な星に落ちられたやうに、心細く、情なく、寂しくなつて、其のまゝ死ぬのさへ、冥土に頼のないやうな、何ともいはれない心持。切て酒でもなくば、迎も立つ

ちや歩行かれなくなつたから、其處で強請に來たわけなんだが。其も勤める役所があつて、おいそれと、直に旅行も出來ないので、一日千秋、此の新年の休暇を待構へた。

今度は、兎も角も一旦男が盟を立てた、其の盟を破らうといふのだから、萬止むを得ない心中をね。利發な姉さんは大抵容子で知つて居ても、是も同斷、つひぞ口へ出した事はないのだから、更めて打明けよう、手紙でいへる事ぢやない。

そんな、こんなで、昨日名古屋に出掛けたんです。

赤帽は庇を斜に、酒に熱して色づいた、耳を傾けて聞いて居たが、

「はあ、」

溜息をして、獨で領き、

「酒も唯、怨うがぶく頂いて了へば其までで、此の娑婆を素通りにしたも同一で、何の味もないてございしますが、そんなに嚙めて召食つた、其の御酒は貴客、まつ、どんな味がしたでございませうな、と舌打をしながら染々。

旅客は案外氣の抜けたやうに、

「いやはや、甘からず、辛からず、苦からず、澁からず、他愛のない、力のない、當のない、水

のやうだといひたいけれど、それも汲立を飲むやうなもんぢやなかつたさうだ。」

「へい？ 然ういたしますと、と力を入れる。

「實は飲まずさ、」

と崩折れていつた。

「おう、それぢや、其の姉さんとおつしやる夫人から、何てつてもお許が出なかつたのでございませうか。」

「何これを許さないやうな思ひやりのない婦人なら、東京からわざく、誰が強請りになぞ來るもんか。また、はじめツからそんな人には盟もしないさ。」

「では貴客、」

「居ないよ。」

「はて、」

「留守さ。暮の三十日から奈良へ旅行をして留守だといひます。其の主人も居ない、是は公用で、もつと以前に、佐世保の方へ行つて居るんだ。」

あとは書生と女中ばかり、森閑とした留守宅へ、昨夜一晚、望の酒處の沙汰ではない。

然も歸宅のほどは知れずといふね、然う何時までも家をおあけはなさるまいつて傍ぢやいふの

だが、日限で抜けて出た身體だらう。松の内待つて居る数ではないから、唯もう茫乎、三時間と五時間と、恚うして居ては、魂が抜けて、身體が藻脱の殻にならうも知れぬ、又の事、と思ひ切つて、晝過ぎ、出發て歸ることに極めると、それでも未だ買つて歸る土産に氣がついたもんだから、

旅客もついで、話の次手に心付いたか、又革靴を開けて取出した。

「談話に紛れて、すっかり心付かなかつた、爰に好下物がある、灘萬とかいふの蒲鉾ださうだ。汽車の中で、酒の時ツて、内から……旅籠屋で、お歳暮に到來といふのを達引いてくれた。一ツ喰はう、君もやれ、甘いぜ、此品は。」

十五

「其處で書生さんに調べて貰つて、革靴に積込むと、直に出發。」

皆が見送らうといふのを、いや、暫時の間も留守が大事だ、か何か氣の利いたやうなことをいつて、其の代り、停車場まで腕車を、といふので、帳場の雇ひ込んで、さつさと引出させたは可い。これが其ま、此處へつけば、何の仔細もなかつたのに、途中で、彼の記念碑を見ると、フト魔が魅して氣が變つたんださうさ。」

「え、其處で、あの紫川へ。」

「否、そら、ものが記念碑だらう、何か不知、禁酒事件に取つては、千之助に一大記念のある牡丹亭だ、腕車の上で、不圖其處を思ひ出した。」

行つて見よう、と突然聲をかけて、梶棒を其方へ向けさしたんだ。

餘り物足りない旅行なり、飽氣なし、それに汽車も此の急行があるといふ考へで、牡丹亭へ行つて見ると、一寸腰をかけてと思つたのが、つい、其の何となく懐しくつて、歸られない。酒は飲めないのに、肴は鮑、あの片思ひといふのなんぞ、氣にして箸もつけないで、人ツ子一人居ようぢやなし、寂れた景色を視て居る中、雪がちらくくと降り出した。

厭に底冷がして、一體昨日あたり、青空が見える底から、時々さつと、高い銀杏の梢から、落葉するやうに降つたつけ。

又此の雪が禁物なんだ。

録雪紅

何でも千之助が其の戀人を見納め、といふのが、其の人、湯あがり、ほんのりして、濡髪が思はせぶり、横顔にかゝつた姿で、机に頬杖をついた處を、硝子窓、其の窓へ一ぱいにしつきりなく、雪がかゝつてこんもり、球で飾つたやうなそこへ、ぼんやりと赤く灯の影が映るのを、杉の垣根越。其の家から歸り際、玄關で分れた道が、屋敷町の裏手へぐるりと廻つて、送つて部屋

へ入つた令嬢の居間を、梅の枝から透かした處。

然も結納の取交はせのあつた夜さ。千は、

旅客は激しくいつた。

「男子でありながら、何だらう未練らしい、雪の中に立竪んで、暫時熟と見る内に、見る／＼中に其の令嬢の顔の色が部屋の中の暖さに、硝子窓には露さへ置いたのに、颯と青白くなつたのを、あゝ、心の冷さが、面に顯れる位な女と、怨みに思つた事もあつたが、天死をされた時には、ぢやもうあの時分も、影が此の世の人ではない、早や既に白玉樓中の仙女であつたのかも知れないなどと、何かにつけて愚になつて、くだらない事も忘れないから。」

雪で又思ひ出した。

然も急には留みさうもない、其處等も白くなる、火鉢を壓へてつくねんとしたツ切、名残が惜くつて立てないから、日の暮れるまでも恚してなぞと。

しかし冷い中に待つて居る車夫は氣の毒千萬、それに新年で急しからうと、其處で、荷物を引取つて返したさうだが、此が又悪かつた。

さあ、居ると極めると歸りたい、何の、一人で其處に熟として、日の暮れるまで遊ばれるくらゐなら、最う一晚、姉さんを待つたつて可いわけなんです。

革靴を提げて、せつからに牡丹亭を飛出すと、いつかの大池の岸について町はづれまで一町足らず、火傷をして乗せられた時覺えがある、此處で車を、と思つたが間違で、さあ、無からう。

記念碑の處まで出さへすりや電車もある事と、其のまゝ目つぶしを喰ふ雪の中をかまはず、突切つて何町か分らない、方角をつけて急いで來ると、間の悪い時といふものは。何と鼻緒がブツツリ。

雪は薄くかゝつたばかりだから、踏留まるはずみに路の悪い處へぐつしやり足袋蹴足、出るも引くもならばこそ。

幸ひ土塀板塀だの生垣つゞきの裏町で、一人も人通はなかつたから、魅まれの體で躍つた形は、御當地の人へ見せないで済んだが、其まゝぢや何うする事もありません。

可鹽梅に、雪も小降になつたから、おまじなひほどに白く積つた、路傍の杉垣に革靴を寄せかけて、ともかく馴れぬ旅路といふ體裁に、……下駄を結へつけようとして居ると。……」

十六

「(貴客、貴客)と優しい聲で呼び懸けた婦人がある。
此方は手巾を引裂くのも面倒だから、其まゝで、と俯向いて結んで居た處、其處等に知己はな

し、婦人だし、別に通りがかりのものがあつて、其に話しかけたのだらうと思つたけれど、呼ぶのがつい耳近で、宛然枕頭で驚でも鳴くやうだから、振り向いて見ると直ぐ背後。

革靴を立てかけた杉垣の其の枝折戸に、目の覚めるやうなのが立つて居た。

年紀は二十三四、後で七ツになる兒と、五ツのと、二人の母親であることが知れたんだから、六、七かも分らない。

生際の濃い、あまるほど澤山な髪を花月巻で、牙々しく燦々する寶玉を飾つた横櫛、乙女椿の花簪、目の涼しい、二重瞼の、頬のふつくりした、色の白い、口許の緊つた少し濃過ぎると思ふ程に眉のくつきりとした、脊も些高過ぎるばかりだから、猶見榮がある、肉が厚いといった柄で、立増つた品格があるではないが、何となく總體におもみのある、其が然も媚めいた形容だつたさうだ。

一寸見には……先づ、燃え立つ牡丹の大輪なのを、どんより曇つた少し蒸暑い日に、身體へ汗ばんで視めるといつた風情。顔を見たばかりでも、ほんのり人肌の暖さが身に染みて、ちら／＼降つて居る雪も、其の人の身に觸ると忽ち颯と薄紅、花片にもなりさうな。傘はさゝず、赤い鼻緒の上草履で其こそ小留みのない白いものが、圓く積つたやうな新しい足袋。構はず薄雪の庭芝を踏んだが、片褌がぞろりと爪尖にかゝつて、惜氣もなく、蓮葉に小肥りのした二の腕の露なま

で、枝折戸の柱に高く片手をかけて、伸上つて覗くやう。

片手に桃色の絹の巾をはらりと、其の手で上前の褌を取るやうに、葡萄鼠の風通お召の上衣の、朱鷺色の扱帯があらさまに、恣うすり下つて幅廣な、其下あたりで軽く指のさきで引上げたが、一體に着崩れのした、下着はづしりと更紗縮緬、紅色友染の對丈襦袢も、裾長う、身うごきをする藤色の其の裾が、はらく／＼となる、しどけなさ。

上に黒縮緬三ツ紋の羽織を、無造作に引つかけたが、肩を這つて、其の褌を取つた手首かららんで、緋綸子の裏が、だらりと肩へ、一太刀浴びた紅かと、罪も、報いも、情も、色も、其處から溢れるばかりの装。

見てさへ然うだのに、片膝取亂したほどの酒機嫌か、羽織のすつて落ちるまで、炬燵にでも蒸されたらう、うつとりと濕ッぽく、霞を帯びた肌の艶、顔の色、雪にめげないのも道理であつた。

(私ですか。)

(貴客、嘸御難儀でございませう。)ツていつたさうだ、こりや勿論鼻緒を踏切つたのを見て、しんせつで出て来たんだね。

然ういつて、兩手で巾を抜いて、斜達に胸へかけて、裂く眞似をした時、微に口を歪めたが、(あれからお見受け申しまして、私も、あの、手巾でも差上げませうと思つて来たんですがね、

お待ち遊ばせよ、貴客、それぢやお穿物が間に合ひましても、御足が泥だらけで、あれ、臺なし。お氣味が悪くつて不可ません。まあ、一寸お寄り遊ばして支度をなすつて行らつしやい。さあすぐ。否、私だつて、お世話をやかして頂きたいと存じて、出て來たのでございますもの、御遠慮を遊ばすな。誰も居りはいたしません」と莞爾していつたさうだ。

平に辭退をしたんだが、又雪も増して來たし、つい其の言に誘はれた。

(お庭口から失禮です、お言に甘えませんが、しかし表へ廻りましてお臺所口で何うぞ。)(貴客田舎家へおいで遊ばして、そんな事をおつしやるものではございませぬ)と招いて手を取るやうに、身體にまで心を入れて、千之助を連れ込んだが、どうして田舎家どころぢやない。

大家の別荘と見えた、生垣の工合などは古風な寮のやうに誂へたが、向うと正面に小高い西洋造の構があるんだ。」

赤帽が突然、

「旦那、其、其奴が、どんなことをいたしました。」と猪口を持つた手が震へた。

「知つてるか、」

「名古屋に西洋室のある別荘は一軒しかございませんで、淫婦!」といった眼の色尋常ならず、ぎろり、旅客の目に映つて、殺氣を帯びて見えたのである。

續紅雪録

「淫婦、淫婦といふか、赤帽君、君は彼の別荘の美人を淫婦といふか。」
 旅客は激しく疊みかけるやうに言ひ返した。

「え、能く彼の體が、白い膏になつて溶解けない事だと思ふくらゐなんので、」と横に蒲鉾を喰ひ切つた。

「大層委しいと見える、ありや一體何ういふ身分だ。」

「へい、御存じではございませんか、ありや貴客有名な、……といふ、大したお役人様の夫人でございます。」

「否、そりや聞いた、千之助に聞いたから心得て居るが、其の生立だよ、其の以前の事だよ。」

「まあ、旦那、千之助様を先づ、別荘へ連込みました、あとをお聞かせ下さいまし、承りかけたで、氣になつてなりません。又お話の様子に因りましては、申上げます心得がございますで。」と半ば残したのを口へ入れて、拇指をぺろりと舐める。

旅客は次第に酔がでた、何の仔細もない事を、然も感に堪へた趣して、

「あ、成程、私も人事だが、癪に障つて、腹に納めちや居られんのだ。こんな事を胸に持つて、ぐづぐづして乗つた日にや、雪の上へ、猶汽車が重からう。最うく東京へ歸るまでに、すつかり胸のすくやうにさらけ出して下さいたい。」

其處で千之字だ。

其の媚いたのに連れられて、枝折戸を入つたわ。風俗のしどけない、裾がぞろりと敷きさうなのと並んだ處は、お庭内を道行といふ姿だけれども、前鼻緒の切れた下駄と、鞆とを兩手に提げて、跛を引いて悄乎は、餘り圖の好い形ぢやない。意氣地なしの千の字め、何の事はない、小學校の色男が、腕白に苛められて、泣ッ面で居る處を、綺麗な餘所の小母さんに助けられた有様でナ。

これから何處ともなく、室の花がほんのりと薰つて來るやうな、婦人と肩を、いや婦人に肩を摺寄せられて、些と固くなつたといふ體で、あひかはらず跛でね。薄雪のかつた一面の芝の上を、取着的の其の小高い西洋室へ行くんだが、芝生は眞圓な小さな山の形に出來て居て、段はないが爪尖上。右の方は此の築山の裾を、小川が一條繞つて居たが、水が切れて美しい小石ばかり。窓の梅の北面は雪封じて寒しさ、龜裂が入つたやうに底に凍が張つて居た。通る間、外の樹はな

い、梅がばら／＼五六本、枝ぶりに紅梅だらうと思ふのもあつたが、皆蕾が堅かつた。
 左の方は、遠く奥の方に、黒板塀が、松の植込の中に見えて、此處は、飛石、石燈籠、盆栽も
 ならべてある、折曲りの縁も見える、次第に歩行くにつれて高くなると、目の下に、藁葺の小屋
 が故ツと一ツ、茶座敷と見えて、廂には落葉の赤らんだのが其まゝ、庭も仕切つてお定りの敷松
 葉。横手の、今の縁側に、ずつと障子が並んで、端の一枚が開いて居た、早や樹の蔭は薄暗いか
 ら、其處にでも人が居れば居るだらうかと思ふやうなもの、寂寞して、なるほど、(誰も居りま
 せん)といつたのが眞個らしい。

何でも、此の西洋室は、一室だけ、好事で、別荘の二階に拵へたので、直ぐ扉を開けると、築
 山へ出て、芝生を下りやうになつて居るのだつた。

入口の扉の傍に、前津から廣見へかけて、田圃を見晴しの處に、何處の公園にもある、ロハ
 臺のやうな腰掛が二三脚置いてあつたから、千之助は其の上へ靴を置いて、

(お言に甘えまして、飛んだ失禮をいたしましたでしたが、それでは此處を少々お借り申して、)
 (何です、ね、貴下、まあ、此方へお入んなさいまし)ツツて、二三歩前へ駈抜けると、庭内を練つ

て来た上靴のまんま、半ば引明けたなりになつて居る扉の中へ、ひらく／＼と入りながら、ぱたり
 と其處へ上靴を直して出して、

(さあ、何うぞ、御覽なさいな、吹込みますぢやありませんか)と半身を出して硝子の戸越。
 雪が又颯と一時

二

「(本宅は貴下、これでも何です、賑な町の方で、近所が騒々しいんですよ。其にね、主だつた
 人は暮ほどから、上向きの用をかねまして、東京へ參つて居て、留守なんでございますけれど、
 春だもんですから、つい人出入が多し、客も澤山で煩くつて不可ません。

師走から又何の彼のつて、氣忙しくつて逆氣ましてね、大概病人になりましたから、一日ゆつ
 くり。些と手足を伸ばしませうと思つて、今朝起抜けに、此方へ參りますつもりにして置きました
 のに、出掛けようとする、又二三人、餘所の夫人だの、お嬢様だの、中には御夫婦づれで入ら
 つしやるのなんかあるんですもの、ひとり者の處へは罪です(ね)と手巾を口に當てなんぞ。

(やう／＼お晝過ぎになつてから、出て參りましてね、一日だけ、尼になりました氣で、おもい
 れ休まうと思つたんです。

然ういたしますと、女中どもが、憎いことを申すぢやありませんか。
 どうして賑かな事の好きな、私がですねえ、洒落にも、好事にも、一人で別荘へなんか入らしつ

て、半日だつて辛抱がなるもんですか。須磨、明石は、本で読んでこそ風情がありますけれど、
ッて女中が云つたと謂ふんだが、そりや何うだか、大方自分のこしらへた、言葉の綾とかいふん
だらう。

それでも聞く者にや趣があつて、優しい氣がする、別嬪なかくの學者さ、君が云ふ、いつれ
蝦茶を穿いたものと、直に分る。」

赤帽は讀めたやうに、讀めないやうに、

「へい、人相に露はれるでございませうかな、蝦茶にも、ありや山に千年、寄宿に千年、甲羅の生
えた萬年蝦茶でございませう。」

其の癖、見た處は學校あがりのやうぢやございませうまい。私は能く知つて居りますが、豪いお
役人の夫人で居ながら、悪くすると、高等淫賣、商賣人上りも藝妓ぢやありませんで、女郎上り
のやうに、べたついて、第一、あの裾ツつきを寛うして、蹴出をふんだんにひらめかす工合なん
ぢ、容易ぢやありませんや。あゝいふのは、何でも袴馴れた處から、腰を引括る紅いものは、禮
服と心得て、惜氣もなく踏み出すでございませう。何だつて貴下、婦人の癖に、帯がなくつて
歩行んだから、蝦茶を穿いた圖は、悪く見ると大道中を禪一ツでお練りも同然、肥つてこそ見
えますけれど、長襦袢一枚といふ姿だ、無法だらうぢやありませんか。

奴め、其に馴れ切つて居るもんだから、ツレひらくとやるのは平氣でさ、不躰千萬な、私ア
考へますが、屹と其の千之助様とおつしやるのが、しどけないッてお話しだと承りますから、
是非其の風を、見せられたのに違ひますまいと思ふですがな。」

「なに、其のくらので濟むものか、磨き込んだ槻の卓子を圍んで、差向ひで居ると、椅子へか、
つて居ながら、下で密と足を踏む。」

「はあ、はあ。」

「婦人の方からだぜ、千之字は、汚れた足袋を脱いで上つたから素足だらう、又素足でなくつた
つて、こりやヒヤリと應へる。」

「畜生」といつて赤帽は陶然として酔へる顔の、頬を膨らして天眼に的なく睨んだ。

旅客は頬杖で下を見ながら、駒下駄の尖を刻んで、

「寒からうと云つて、椅子を引摺つて暖爐の前へ揃へて、無理に並んで掛けると思ふと、手を出
させて、翳させながら、貴下のお手の方が小さいか不知、なんて、見て居る中に、指環の嵌つた、
細い指で、一寸突くな。」

「それだ、それだ旦那。」

「然うかと思ふと又、逆上せるくと云つて、目のうちを颯と紅くして、肩を落して横顔で覗込

むやうにして、

（女は何爲ぞうなんでせうね、貴下の其の冷いお手を、ぢつと當てて下すつたら、どんなに清
清するでせう、厭？ お厭なら、撲つて頂戴、さあ撲つて頂戴な、撲たれると私嬉しいの。）なん
のツて云つたさうだ。」

赤帽は厚い唇を割つて、生々しい牙を剝いて、變に笑つて、
「吐かしてけちがる。」

三

「今度は、（さあ暑いから、些と其處等を視めませう、別々に立つちや厭よ、貴下は直に景色に見
惚れて、傍に居る私を忘れるでせう、恚うして、御覽なさい。）

と云ふと、二人で打違ひにかける低い椅子さ。

（私も煙草が喫めましたら、恚うして居て、煙だけ含まして頂きませうのに、飛んだ不粹です
わ、）なんかね。」

「其の術、其の術！」

「然うかと思ふと、

（でも恚うやつて、何時まで居られる身體でせう、貴下は下駄の緒さへたちましたら、直にお歸
りになるんですもの。離れる稽古をして見ませう、）とはらりと立つと寢臺にぐつたり、崩れた風
情に腰をかけて、俯向いて、

（あ、寂しい、お、心細い、つまらない、歸すのは厭になつてよ、貴下お泊りなさいまし。）」
「吐かしてけちがる、厚かましい、」と赤帽は呻つていつた。

「何の爾時の千之字が、厚かましいと思ふものか、最う、悄げて悄げて悄げ返つて、いくらか其
の姉の情で、血の動いてるやうな人間だ。はる／＼来て其にや逢へず、婦人の今のいひ種ぢやな
いが、寂しい、心細い、詰らない處で、牡丹亭の雪で無常を感じて、鼻緒が切れたので、既に滅
亡。氣も魂も腸も凍りついた處へ、優しい、情らしい婦人の、而も誂へたやうな美人のだね、
何の事はない、久しい間の禁酒のあとへ、一滴、恐しく酔ふ、強い、烈しい、怪しい、花の露を
注込んだやうなものだ。」

然も吹曝の雪の中から、襦袢も襟も袖も、色の濃い、蕊の長い、花片の大きい、香の高いの
が名も知れず爛漫として、天竺の名所に咲いたやうな、硝子室へ入つたばかりか、暖爐はくわつ
くわつと。

奴は最う扉を開かれて茶色の窓掛で包まれた、一面に黄色いやうな、室へ入つた、のつけから、

耳は鳴る、肉は躍る、血は走る、唇は乾く、足は痺む、膚は荒る、氣味の悪い汗は垂々流れる、碌そッぽ口は利けず、饒舌れば前を越される、言質は引たくられる、體のいゝ生娘が婚禮の晩の如しだ——其で幾歳だと思召す、姓は深見、名は千之助行年かぞへて二十七さ。早熟だと小兒のある年だ、馬鹿な奴だ、だから惚れた女には不叶戀で、指をくはへたあとが禁酒、禁酒のあとが姉さんお留守で、あとで鼻緒を踏切つた、それから酒だ、此の後でお茶漬を食べるとおいしい、お汁粉も悪くないが、婦人は不可い。凡そ鳥鳴が悪かつたり、鼻緒が切れた前兆で、情人の出来た験がない、内へ歸ると女房が返討か、主人が自殺ね、母親が病氣か、爺様が頓死だ、然もなけりや借金取が居催促。然も新しい穿物ぢやないか、尤も餘りお高くないのだ。然し可い酒だ、大に飲む、さあ、君も飲め。」とはずんで手を伸して猪口を衝と出すと、此の人の談話は、酒が言はするのであることを、其の容貌と風采と舉動とを見て悟りつつ、猶後談を聞かむことを欲する思切なる赤帽は、途中で切らすまじとて波々ところ注いだりけれ。

「そんなだもの、何うして厚かましいなんて、心で澄して蔑みなんぞ出来るもんか。」

君聞け、其の愚なることの甚しきやだ、甚しきに到つては何だ。庭から入れようとして、硝子張の扉から先づ半身を出してな、

(さあ〜)といひ〜入つても行かず、立つて覗いて待つた時の、其の婦人の顔がだ、亡なし

た戀人に背て居ると思つて、天窓から悚然としたと謂ふぢやないか。

いや、そんな、ちよろツかな料簡だから、嫌はれたに相違ない、又嫌はれるやうだから、女早のした奴だ、尤も紅い雪はためしがあるが、女の降つたといふことは、年代記にも記してない。

まあ、君、聞け、其の氣で聞け。」

「え、聞かんで何うするもんです。」

「それだもの、泊つて行けと云はれたので、まさか泊らうとは思はなかつたさうだけれど、間拔め、眞面目になつて辭退をした、其のいひぐさを聞き給へ。」

(飛んだことを、貴女の御名譽のためにも、私は直ぐ、お暇をしなければなりません、)さ。」

四

「尤も此人はね、兩親が世を去つて、東京の山の手に、學校へ通ひながら、自炊をして居た時分、花が咲いても出嫌ひで、日曜にや朝寐が樂み。大戸も兩戸も閉めたま、半日引被つて居ると、郵便が来て、配達が戸を叩いても、起きないから、合長屋の娘が受取つて、庭口から廻つて、しまりはな縁側の戸をあけると一所に、庭の櫻が、はら〜散つて入るといふ、春風の暖さ。ぐつすり寐込んで居るのを起して、手紙を渡しながら、若旦那、私も眠うございます、裾の方へ

お邪魔をさして下さいませ、トくの字形になつて謂つたと思へ。」

「旦那、何のお話してございます、怪しかりませんな、へ、へ、へ。」

「否、先づ譬がだよ。うむ、寐たけりや入つて寐ろ、といふと其の娘が笑つて云ふのや、一寸、こんな時は、厭だ、成らん、不可い、とおつしやるもんですよ。然うしないと、おいやなら、殺して頂戴か何か、機会がなくなつて入れません、と笑つて出て行つたので、舌を巻いて、今時の女は、と、驚いたといふ。何、本人は眞個、眠いから頼むことと正直に取つたんださうだ、些と時世後れな人だな。」

「そんな事は後れた方が結構で。」

「だがね、其の氣だから不可ません、寢臺に腰をかけて、今夜は泊れ、といふのを、矢張鼻緒の世話をしてくれようと云ふの一般、雪は降るし、……尤もそれまでに、豫め、折角當にして、わざ／＼東京から尋ねて来た、姉が奈良行の留守のため、詰らなく、失望して歸るツて事を話したもんだから、心を察して、しんせつに泊めようと云ふのだと思つたので。勿論、姉さんが此方に居りや、最う一晚ぐらゐる逗留する筈の事を、話して了つた後だから、用があるの、急ぐのは、言譯になるまいぢやないか。其處で、

(貴女の名譽のため)さ、いひ種が厭味だね。

すると別嬪は、身體を投げ出したやうに、上靴の裏を見せて、男の方へ、白い爪先を揃へて反しながら、寢臺に深く手を支いて、長く伸ばした膝の上で、手巾を輪にしたり、はらりと解いた

り、
(殿方にこそですわ、何の女に、名譽も身分もありませう。お泊り遊ばして下さいませりや、却つて私の名譽ですわ。まあ、お馴染もないのに厚かましい、それでも氣の利かない旅館屋だと思つて下されば、随分肯入れて下さつても可いやうに存じます。お厭でせう、お厭でせう、お厭でせうが、行暮れた旅の空なら、野にも山にもお寐らないとは限らない。唯もう一思ひに然う斷念めて下さいまし、そんなにして在らつしやると、種々、東京の夫人の事やなんか、お考へなさるから、言ふことを背いて下さいません。思ひ切つて、恚うして)といふと、上靴を脱いで、其の足を何だ、ふつくりした裾にくるんで、するりと浮して寢臺の下へ活潑に横に寝た、上前を引張つても、友染は媚しい。」

「其だ、旦那、」

と赤帽はフト調子高に言つて、拳を握り、腰を曲げて、相撲が仕切つた身構で、激しく足踏をしたのである。
「寝て見せて、

(さあ、一思ひに恚うやつて此處へ横にお成んなさいまし、私が搔卷を持つて来て、密とおかけ申しませう。然うして目を瞑つて頂戴な、然うすりやもう、斷念がついて泊られますやうになりませう、よ、然うなさいましよ、貴下後生だから、然うなすつて下さいよ)といつてね、まくれた袖の二の腕の、雪のやうなのを惜氣もなく、小兒のやうに寢臺を打つて、手巾を投げちや釣り寄せる、其の桃色のが靡く度に、得ならぬ薫が馥郁として、霞の梯、渡れ、渡れ! どうして猫がチヨツカイで、轎をおもちやにすると思へるものか。

初對面の男にそんな事が、と思ふかも知らんけれど、なか／＼其くらるは何でもない、あとで、薄茶を一服といつて、下座敷へ連れて行つてから、火鉢を中に差向ひとなつた時にや、じり／＼と摺寄つて来て、膝をね、膝へ、

「汽車が出ます」と野放圖な大聲、扉から坊主天窓を出したのは例の豫言者。がらんと鈴が鳴りはじめた。

五

「お待ちなさいまし、旦那、唯今出ますのは急行が着いたのでは無いでございませう。此の名古屋を十一時三十分に出ますのが、あとが來ませんために是まで見合せて居りましたのを、餘り遅く

なりますに因つて、仕立てて出すございます。こりや一々停車場へ寄りますですから、のろ／＼つて仕やうがありません。」

「然うか。」といつて、少い旅客は、一度立ちかけたのを猶豫つたが、早や此の待合には、荷物も人も其の隻影を留めなかつた。尤も汽車の出發することを知るとともに、念のため赤帽は勢よく駈け出して其の急行にあらざること、確めた上引返して來たのである。

其の間に旅客の醉顔に映じて、待合に在りたる同勢は、最後に入つて來た、彼の名古屋美人を眞先に、學生が續き、士官が續き、商人を前後に、少女を連れた老夫婦を眞中に、暖爐係が間に挟り、瘦せた貴婦人と肥大紳士が其のあとへ、めりやすの股引が殿して、別に二三の赤帽と荷物とが間を縫ひつつ、朦朧として一方口から出て去つたが、恰も消え失せたやうな感があつた。

「しかし、不殘乗つた」と改札口の方を伸上る風情で、旅客は迷へる面色である。

赤帽は根を生してヌツクと立ち、

「お話のあとが承りたいで、お留め申すではないでございませう。此の汽車は恚うやつて平時一時間餘り前へ出るですがな、すぐ早や停車場五ツと行かない中に、急行が、ガツと背後から出抜いて乗越すでございませう。其の氣の利かん事ツたら、辛抱が出来るわけのものでないですよ。

折角お待ちなすつたものだ。

如何に後れるツたつて、彼是二時半、追ッつけ關ヶ原から乗りつけませう。」
未だ決せず、差俯向き、

「是は何時だ、新橋着は、」

「お極りは翌日十二時といふのでございますがな、得て、後れ勝なのが、此の様子ぢや、雑と四時頃にはなりません。旦那悪い事は言はんでございます、思ひ切つてお待ちなさいまし、え、もう暫時。」と心から留めて云ふ。

旅客は黙つて、やゝあつて、

「君も、寝轉んで、留める方だな。」

「はゝ、はゝ、はゝ、はゝ。」

「いや、引留められて良い事はないのだが、可からう。——」

「お待ちなさいますかな。」

「其のかはり、もしか、來なかつたら、夜の明けるまで附合ふんだぜ。」

「可うがすとも、」

「可いかね。」

「然う極つたら、」と手を伸して扉を引寄せて鎖さうとする。

と云ふ構内から、つツと入つたのは一名の驛夫で、此の待合の卓子の上へ、鈴をがちやんと置くと、此方をじろりと見て、身を開いた赤帽に擦れ違つて、ドンと自分で向うから閉めた、これは寐に行くのかも知れない。

汽車は汽笛も鳴さず、雪の上を幻のやうに、熱田をさして、横に長い、薄い茫乎した火の光が野中に埋れた時分と覺し。

「酒は未だある、眞個に頼んだぜ。やがて無くなるわ、火が消えるわ、汽車は來ないわ、君は行くわとなると、旅籠は遅し、腕車はなし、あつても行く處はなし、名古屋は厭だし、然うなりや自殺だ。」といった。

赤帽は色を作して、屹と腕組。

「飛んだことをおつしやらあ！」

「何、其の千之字だとさ。私はどうして、いざ慥うなつた日には、汽車が來たつて、饒舌つちまはなけりや乗りやしないが、可哀相に。」

千之助は散々なぶられたあとで、別荘から追ひ出された。やがて、十時過ぎよ。それも、雪が吹雪になつてからだ、何の、何の罪もないものを、……」と少し途切れる。

赤帽は熟と見て、

「旦那、緩りうかゞひますで、それから何うしたでございますな。」

六

「いかに千之助を嘗めてか、つた悪戯だつて、唯鼻緒を立ててやるなんかで、呼び込んだばかりで、此方が名古屋へ来たわけを話すものでもなし、又先方だつて突然、泊れ、寐ろなんと云ふ數ぢやない、言つた處で誰も眞面目に挨拶をするんぢやないのだが。」

其處が今のね、須磨明石の一件です。

はじめ、別嬪の云ふのによ、

（女中が然う申すんでございますよ、須磨や明石は本で讀んでこそおもしろうございしますが、其のお體になつて御覽なさい、どんなに寂いか、心細いか情ないか知れませんが。別荘へは、多日誰方もおいでなさらず、寮番の爺や一人、お疊もお廊下も石のやうに冷くなつて寂れ切つて居りませう、場末だし、人通はなし、馳の名所なんですもの。爺が又、談でもある人なら可うございしますが、五十年前の事を、私が小兒の時分、といつて其の時に、其の祖父から聞いたこと、あれこれといふ他に、世間話は、因果經の引き事さへ存じません。そんなものを對手にして、貴女の御氣象、何うして御辛抱が出来ませう、狸が出ますとさ。なんのと申して、人を馬鹿にして留めま

すのが、貴客。

女中たちは私に御褒美を驕らして、歌留多や雙六といふ巧なんでございますわ。

まあお前たち、お湯へ入るばかりが身體を清めるのぢやありません、たまには一日、浮世も離れて見なければ、と高慢なことをいつて、斷つてと申したものですから、そんならおいでなさいまし、其のかはりには誰もおつき申しません、晩のめし食りものも、お重詰で持つて參つて、直に御免を蒙つて了ひますが、貴女お一人、お別荘へ流しものになつて、尼寺でお寐なさいまし、と口惜坊。

あ、可いよ、可いとも。寒さに清水が涸れないで居たら、それで道明寺で凌いで見せるよ、晩の支度にも及ばない、と争つて參りました。

師走のはじめの煤拂の時に、一寸見まはりましたばかり、絨氈を敷いてあるべき處へ、筵を擴げて、爺やが私得に搗かせました、缺餅を乾して並べてございますやうな寂れ方なんですもの、何の床の間を見ましても、懸物一幅かゝつて居ず、花一輪咲いては居ません、赤いのは爺やの鼻の尖ばかり。

漸ツと思ひ切つて出て來ました、行火の香をさして立働くぢやありませんか。

それでも來がけには、大層威勢よく、霜げて寒いのに、十疊の眞中へ、濕ッぽい炭をついだ、

火鉢か何かで、縁側の障子を明けさして、淋しい冬木を視めながら、おや／＼何十里來たか不知、此のさきに名古屋といふ町があるのかと、望み通り、浮世を離れた心持になつて、ソレ見たか、内ぢや寂しがらう、可い氣味だと、風説して居ようが、然うは行かないとをかしくつて、氣違ひ染みた、一人で莞爾笑つたり何かして、澄して居りましたが。

ちつと鬱ぎ込んで來ましたのが、貴客、宅を出て參つてから二時とは經ちませんのでございませぬもの。まあ、こんな事では今夜どころか晩方までも覺束ない、何うしたら可からうと、大概苦に病みます内、ちら／＼白いものが降つて來て、枯樹に花も咲きかゝりますから、いくらか紛れて居ましたがね、寒い何のぢやございませぬ。

床の間に掛けた節藁の大なのが、ざあ／＼鳴りまして、蟹が家の蓑かと思ふと、山奥の瀧にも見えます。

掃除は綺麗にすると見えて、其處等に塵一葉ございませぬのが、水清ければ、と申すやうで、人の住んで居るやうぢやないのですわ。神様ぢやなし、佛様ぢやなし、よく昔から申します、お城だの、大な邸には不開室といふのがあるんですツて、座敷の眞中に、お化粧をして、婦人が、客でもなし、人を待つでもなし、悄乎と坐つて居ます、私の身體が、其の不開室のお化のやうだと思ひますと、悚然として、貴客、堪らなくなつて、此の見晴しの二階へ駈け上つたんでござい

ますよ。)と滑らかにすらく／＼やる。尤も話は前後したが、こりや其の西洋室へ、千之助を入れてから直ぐの事なんだよ。」と引かけたが。

七

杯を鞆の上、旅客は腰かけに胡坐となつて。

「(まあ、何より先へ、爺に暖爐を焚かせまして、肩からぞく／＼震へるのが留りました、御覽の通り、此の室は、こんな陽氣なんですから、やう／＼、雪も視められるやうになりましたけれども、寂しいのは同一で、詰らない何のぢやありません。

然うかといつて餘計な我慢のやうですけども、今更阿容々々、歸るのは口惜しうございませぬし、泊るとなると、どうして貴客、思ひ出しても下座敷が悚然とする、おともだちを呼びませうにも、正月だと申すのに、誰が尾になるお交際をしてくれます。又、間違つて、望んで來る者はいくらもありました處で、氣に合ない人とお話をいたす位なら、はじめから今日此の別荘へは參りませぬ。

何うぞ助けと思つて、おゆつくりなすつて下さいまし、よ、後生でございませぬ。ツちや、ソ

レ卓子の下で爪先を觸る一件だ。

暖爐の傍へ引寄せたり、椅子で背中を附着けたり、とうとう寝臺の上へだらしない寝やうをした。

「そんな處を畜生、奴の胸を突通して、彼の生つ白い皮の下にや、だく／＼どんな風に血が流れるか、一番淫婦め、お極をやつて居ら。」と横顔になつて顔を尖らした、薄い髻がすつくりと立つて見えると、肩を聳かして、赤帽はだぶ／＼とした衣兜の中へ、手を突込んで血相する。

爾時さした杯を、對手の胸のあたりへ出したまゝ、差控へて、旅客は屹と見たのであつた。

「君！」

「は、」

「無禮な奴だ、君なら殺すか。」

「殺、殺しませいでか。」

「む、まあ、飲め。私なら私も殺す。」

「旦那も。」

「いや、其の場合に臨んで、然も其が我が色を誇つて、男を愚弄して、半日の無聊を慰めた上に、人の迷ふのを以て自分の容色の美しいことを、自分に證據立てる道具にすると諭つたら、少くとも

生かしちや置かれんと思つたに相違ない、たとひ手は下さんまでもだ。

千之助だつて、いかに内氣だといつて、意氣地がないといつて、男兒は男兒だ。然うと知つたら、何、あとの辱を受けるやうな間拔けなことをするものか。

けれどもです。」

けれどもですと弱くなり、

「毒とは知らず、香に迷ひ蜜に酔うて、既に其の婦人を以て、自分の戀人に肖て居ると思ふ心から、牡丹亭の雪といひ、鼻緒の切れた小路といひ、不意に天降つた天女といひ、不思議の縁といひ、故郷から遠く離れた旅といひ、唯酒が飲みたいくらゐに、わざ／＼名古屋まで來たのといひ、姉が留守といひ、前後はまるで夢のやう、今自ら不開室の化粧した幽霊といはれたので、其の下座敷が歴然と目に浮んで悚然とした氣といひ、……あゝ、それほど今も思ふのに、一言心も通じないで、幽冥處を隔つたのは、あまりに果敢ない。其のあまりに果敢いために、此處で夢を見るのであらうと、茫然として、思はず、寝ながら投げた手巾の胸にかゝつた片端を、じりゝと取つて引かれて寄つた。

「あれ」と一聲。

「え！」

「思ひ出したやうに起直つて、

(まあ、私やどうしたんでせうねえ。)

「それ〜。」

「喃、君。」

(何うにも慍うにも、寂しくつて、氣が沈んで、消えても行くやうに思ひました處へ、貴客をお連れ申して參つて嬉しいまぎれに、お茶もまだ差上げません。

お泊り下さればお客様、お泊料を安うして、晩のお支度をいたしませう。それには女中が本宅から重詰を持つて參りませうが、爺やに申しつけて、お湯もすぐに沸かさせます。御酒はいかゞでござんすえ、ほゝ、ほゝ。)

なんて仇氣なく、そは〜して。」

八

「まあ、お茶を上げませうにも、あの好な缺餅を、齒のないどてで含みながら、がぶ〜飲みます、鼻の赤い爺やの、行火へかけちや煮くたらしは、貴客お氣味が悪いでせう。其のかはり内職の草鞋を造る人ですから、お鼻緒は上手に出來ます。もう〜尼になりまして行のつもりで來た

んですから、お煮花の用意もございせんが、お待ちなさいまし、四疊半には、いつかいたしたまゝの棗がございませう、粗末ですが道具も揃つて居る筈ですから、一服たてて差上げませう、行らつしやいな!)

すつと遠慮のない、十年の知己をあしらふやうに、ものは謂はさないで、すつと扉を開けてさつ〜と廊下へ出ると、こゝに白く塗つた欄干がある、直ぐに螺旋形の壇階子。下りようとして一寸つかまつて、背を曲げると、むかうへすすきりと顔が映つた、色の白い眉の鮮かな。其の取着に姿見がかゝつて居る。

其處へ、上靴の音を軽く行くと、

(來て下さいいな。)

(何です。)

(此處をね、少々開けたいんですが、しばらく見た事がありませんから、何かあるか分りません、颯でも飛び出すと、氣味が悪うございますから、傍に居て下さいいな。)

姿見の下が、けんどんで、小さな謡の本に扇を打違へにつけた、色紙が張交ぜになつて居ようといふ大變な和洋折衷。

開けると、冷い、美しい、戸棚の中に、友染縮緬の肩當をした、藍、紫、黄など五色染の絹夜

具、桃色の裏がすらりと見える。

(まあ、い、こと、雨傘にも化けないで)といつて、何だか開けるのが大事なから、氣にして覗き込んで居た千之助の手を、屈んで見て居たのが立上りざまにちツと握つて、稻妻のやうに、片齧を深く、莞爾したのが、姿見に映ると思ふと、取つた手を引張るやうにして、ばらばらと駈け出して、其の螺旋形の梯子段を附着いたなりにトン／＼とトン。

明るい西洋室から穴藏の中へ引摺り込まれるやうに、千はする／＼と落ちて行くと、早や薄暗くなつた疊廊下へ落ち込んだ、直ぐ横手の襖を明けると、十疊室。

向うの縁の障子が一枚開いて、戸外は雪で、こなく／＼に烈しく巴十文字に動いて居るが、何にもない廣間は、真中に小さく、桐火桶と淺黄縮緬の媚いた座蒲團があるばかり、寂として唯疊の青いのが陰に沈んで、帆の影一ツない大晦日の海見たやうな。

火桶の中に、濕つて佗しかつたと聞いた、其の炭も起り切つたあとと見えて、真中に、尉になつて居る。

(しばらく此處で、まあ、お敷きなさいまし、蒲團を裏返しませうか。)と小首を傾けて、千に敷かせて、自分も一所。しばらく肩を合せて、凭れかゝる氣味合で、黙つて居たが、其の内に膝を浮して、軽く乗せると、寒いか、懐手で、うつとりして、

(待つて在らつしやいよ!支度をしますから。)

(否、それには)といふ内に、後姿の、裾捌き、雪の色ちら／＼と、今入つて来た襖の外へ、くると振向いて、全身で大きく振返つたが、すツとしめると、遠くまで磴音がして寂寞となつた。

あとで千之助は、膝を視めてキチンと坐つて、小さな咳をしたが何ういふものか。

雪の降るのを背後にして、床の間を向いて、其座蒲團に乗つて居たが、なるほど瀧だ。恐く大な飾藻だといふぢやないか、當地では。彼するかね。

「え、よく寺方で行るでございます。門跡の書院なんか大いのをかけるですが、何か、立派だといふので遣つたでございませう。」

「其の癖、千家の流を汲むんださうだ、何でも和洋古今に渡るんだな。」

そりやよしさ、やがて半時ばかり、つくねんと待つて居たが、其の時は然まで心細くもなく、不開室と云つた部屋とは知つたけれども、自ら男のお妖と思ふほどにも無かつたさうだ、本人、人間あつかひは爲れないのに。

しばらくすると、内の、おもて玄關と思ふ處に、から／＼と腕車の音さ。

「其のま、出しぬいて本宅へ歸つたですかな。」

「否、曳込んだの。」

「はて、」

「一時、何となく陽氣が立つて聞えたが、頃刻すると、小刻な楚音がまじつて、廊下を二三人で此方へ近いて来る。坊ちゃん、お駈け遊ばしてはお危うございますよ、といふ女の聲がして、それから一團になつたが、襖をあけると、二十二三の仲働と思はれる、唐縮緬の友染の帯をお定りのお太鼓で、厚化粧、切立の絲織の前垂しなのが、薄暗い臺洋燈を持つて来ると、其に續いて、五歳ぐらゐる、洋服の男の兒と、八歳ばかりの被布を着た女の兒が、ちよこくと躍るやうな身振で駈け込んで来た。女中はね、あかりを置いて、一寸會釋して、おいたをなすつては不可ませんよ、と捨臺辭で出て行く。」

小兒たちは、もの珍しさうに、叔父さんの左右へ寄つて、男の兒が、突然火鉢の上へ肥つた赤い手をかざしたがね、片手に剥きかけの蜜柑を一個。

こりや敵の首を分捕つたやうに、座敷の中を差上げて来たものだ。

女の兒も傍へ坐ると、此の方は持つて来た護謨毬を、かさねた袂へ入れて、火桶へ手を出して

一所に左右から顔を見た。

あゝ、よく肖た女の兒だと思ひながら、千馬鹿め、まだ別嬪が此の小兒たちの母親だとは氣がつかず、自分の戀人も姉弟は多かつたなんのと、お話にもなるんぢやない。

それに入りの多い邸と見えて、人見知もしない處が、最初は憎くもなかつたさうだが、男の兒が口を利くとぎよつとした。

（おい、剥いておくれ。）さ。

蜜柑を突つけたから、それでも、

（是をですか。）ツて、火桶の上で、皮を剥いて渡さうとすると、

（厭だ、お獅子にするんだい、お獅子だ。）

分るまい。

（あのね、恠うやつてね、くるりとやるのよ、）と女の兒が高慢に指揮をしたが、薄皮を剥いて引つくりかへせと云ふこつた。

色男畏つてね、指を汁だらけにして、旨く行かない、一片、半分ちぎれたのを拵へると、じろくく見て居たつけ、

（爺や、上手だ。不器用だなあ、）と恠うたとよ。

癩に障つたが對手は小兒だ。

(どうも旨く行きません。)と出して遣ると、ペろりと吸つて、残つた薄皮を火桶へびよい、ヂユウ、残り少なの火が又一倍消えて尉が立つ、眉を擡めて手で拂つて居ると、

(さあ。)と又出した。

片一方で女の兒が、卷莖を見つけたらう。女だけに、お世辭のつもりか知らんが迷惑だ。一本吸ひつけて渡します。

(難有うよ。)と半分ばかり飲んで置くと、あとから直ぐつけて、

(あい。)と出す。

(さあ。)

蜜柑を剥けた。

(あい。)

煙草を飲めさ。

のべつ幕なし、汁がしみて指がべたべたする處へ、煙草の脂が染まるだらう、氣味の悪い事、手巾は下駄を結へようとして泥だらけになつたのを打棄つたし、一々半紙を引張り出すも、お細工ものをするやうだから、汚れた手を袂へ突込んぢや、襦袢で拭く始末。

(さあ。)

それ蜜柑。

(あい。)

煙草。

むら／＼として、え、一合ぐつと呷つたらな、此奴等蹴殺してくれようと思つた。

しつきりなしに(さあ。)と(あい。)

其の中に煙が出るのがおもしろくなつたか、男の兒まで眞似をして煙草の方へ手を出した、飲まねば強ひる、傍を向けばせがむ、屹と見りや泣きさうになる、立續けたから堪らない。舌は涎くなる、咽喉はつまる、頭痛はする、ごほん／＼と咳入つて、胸をおさへて、もう／＼煙草と蜜柑は一生たち物だと思つて、眞個だよ、心の内で泣いたさうだ。

と旅客は呵々と高く笑つた。

十

「可笑からう、君も笑へ、大に笑へ、私も笑ふ、笑つて遣る、壯に其の屈辱の醜態を笑ふんだ。又縁側から覗いて笑つて居たものがあつた。」

婦人が何時の間にか向うへ廻つて、其の開けてある障子の外へ、すつくりと立つて居たのだ。
千之助は煙に咽せ入りながら、胸を壓へて、はア〜いつて、吹通しの方に顔を向けると、其處には、帯は解き捨て、水淺黄の扱帯を寛く、胸なりに裾を引いて、背は一層高いが、先刻よりはすらりとして、其房々とした黒髪が、少しほつれて、頬にかゝつた、小耳の處へ、濡手拭をあてて居たが、湯上りと見えて、しつとりと雨を含んだ、花も枝も雫が垂りさう。色はいよ〜白く、ほんのり薄紅さへさしたのが、洋燈に映つて、あからさまになつたが、ちらりと、姿を残しただけ。

(お寒いでせう。)とばかりで障子を引く。女の兒が、

(母さま!)といふ中に、はたり、はたりと縁を行く重たい蹠音。

千之助は吃驚した、呀、此の兒の親か、上向の用をかねて東京へ行つて居る、内の主な人といつたのは亭主。

と八分は酔のさめた處へ、先刻の女中が、今度は臺所を働いて居たか、それともお背を流した事か、緋の下じめを急拵への、襷がけで入つて来て、

(さあ、坊ちやま、母様がおいでなさいツて、嬢様も入らつしやい。)

といふと、女の兒は寒さうに、兩手を袖につつこんで直に立つたが、男の方は、

(うむ。)といふと、喰ひ残した蜜柑の皮を、ぐしやりと千之助の膝の上。憎體に、

(馬鹿。)

(あれ、何ですね。)といった切、別に取なさうともしないで、女中は其まゝ、二人の小兒は廣い座敷を綾に泳ぐやうにして、一所に悪い潮が退いたわ。其ツ切、何時まで経つても誰も出て来ない、又來さうにもしないで、火は消える、寒さは寒し、ね、火桶に嚙りつくと、菴蓐の吸さしが冷くなつて白骨のやうだ。

手をたゝく分ぢやなし、

(あの、あの。)と口まで出る、人を呼ぶにも遠さうだから、大聲を出すも異なるものなりで、其なりに引込んで了ふ。第一、口も利けないほどに腹が空いて了つたさうだ、然うだらう、碌に朝ツから食はなんだものな。

背中へ附着きさうに空腹な處へ、立續けの煙草にあたつて、悪寒いから頭痛はする、酸唾は走る、千之助は九死一生。

八時半頃になると、戶外へ腕車が出たやうすだ、大方小兒どもが歸つたんだらう。あゝ、然うすると、何か、手足まとひを拂つて置いて、それから世話をして呉れる氣か、然う思へば遠くの方で、時々派手な笑聲、それにや小兒の泣くのも聞えた、なんのと、それまでは、いくらか心を

置いた千之助も、一心に最う、其の婦人が便になつて、あはれぢやないか、他人の女房と知りつ
つも戀しくなつて、顔を見るのを待兼ねた。

寂しさは、前にも増して、鼠の走る音もしない、時々ざあツといふ戸外の音は、積つた上へ眞
白な布、くるく／＼巻きながら降るのであらう。

何といふ身の上です。

其處等を歩行くのも廊下蔭とかいふものらしい。女中は大方、先刻の話の張合で、唯重詰もの
でも届けに來たのを、いくらか手傳はさしたらうが、泣く兒に附けて歸したあとは、煮るにも炊
くにも主婦の手一つ。

馴れない事を恐入る、まさか、汐手の屋形ぢやなし、此處で重詰ものを開くでもない、氣扱
ひをするのであらう。酒の燭でもして居るか、いや、然しそれは折角だが飲めません、と生欠伸
をしたのなんぞ、大藏流、驚流にありさうな、此の男の腹は後學のために、土用干をしいくら
るだ、尤もから乾に干せぢや居たが、

「まあ、何たることでございますなあ。」

十一

「やがて又小一時間も経つたと思ふと、やう／＼寢音が聞えて來たから、膳か、椀か、あの裾を
曳いて媚しいのがと、うつむいて居た顔を上げると、大違ひ。

めりやすの膝小僧を出して、鼻の赤いの。ねえ君。」

「それ／＼。」

「吝な大屋が、夜中に路地を開けるやうな、身構へで、

（遅くなりましねえか、お前様、何時の汽車だ、間に合ふかね。）といった。」

「其だ、旦那。」

「千之助は唯赫としたが、問答に及ばずよ。

（あ、時間だ、失敬。）と一直線に突立つたさうだが、ふら／＼して疊に躓いて、うろ／＼廻る。

爺やが落着いて、

（矢張、はあ、入つた處から出さつせえ、此處だよ。）と先へ立つ。

最う憤る元氣もない、唯恐しくなつて、疊が一町、とあとについて、座敷を出ると、梯子段。

井戸から覗くやうに上へ折曲つて灯影が射す、夢中で上り切ると、消えてもなくなつたかと思
つた自分の體は、姿見に映つた。顔が蒼い。

扉は開けてあつた西洋室、ぼつと燃えるやうな暖さ。

卓子の上に、金光燦爛として、解放した緋珍の丸帯、一所に紐やら、帶留やら、裾やら、振やら八口やら、なえしをれた花束のやうに衣類を丸めて脱ぎ棄てた、寢臺に、其の五色染の搔卷をかけて、ぶつくり沈んで、長襦袢の肩微に圓く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸々と寝ながら、うしろから洋燈を受けて、寶玉人の指環の手に、一寸押へ、軽く斜にかざして、横文字の書を見て居た、枕頭の黒檀の置棚に、高脚の洋杯が一個、ベルモットの瓶が並べてある。

言語道斷、ものもいはず、又いはせさうにもない風だつた。

千之助は此の状に又赫と込上げた、ニコチンの毒を吐きさうになつた胸を壓へて、通り抜ける、入口の戸の處。

すぐに庭だから、開けるトタンに閉めようとする構で、爺が引手に手をかけて待つて居た。

(豪い雪ぢや)

といふ、芝生を見ると、眞白な中に下駄がね、鼻緒の切れたなりで揃へてある。

飛び下りて引摺むと、バツと一時に吹きつける、部屋へもばらりと散り込んだわ。

(ほい)と閉める。

窓あかりに、ロハ臺に置いて入つた、鞆が舊の通あるのを見て、

(あ、姉が名古屋に居たらば、)とはらくと熱い涙。まともに面も向けられない、雪だらけの

鞆を取るや否や、跣足でころげ落ちるやうに、微塵になれ、と身體を枝折戸の外へ投げ出した。

南も北も雪の横町、上も下も眞白な中に、一足踏み留ると一所に、恥をさらへて來た、下駄を、

一ツは前津の田圃の方へ、一ツは記念碑の大通の空へ、叩きつけ、投げ飛ばした。此の椋鳥は、

吹雪の中を、何里さきへ翔けたらう。

赤帽君。

と呼吸をつき、

「で、私は思ふんだ、よくまあ、無事で千之助が、私の居た旅籠まで駈けつけて、無事に生命があつたらうと。

何事も思はない、唯何爲憐ういふ時、風に乗つて、姉が奈良から歸つて來てくれないのだらう、と其ばかり思つたつてな、可哀さうぢやないか。

迎も、此のまゝでは歸られないと云つて、人心地がついてから、紫川へ行つたつけ。私も強ひて留めなかつた。唯聞いただけでさへ、少時も早く、名古屋の土地をはなれようと、私は自分で思つたがな。汽車のおくれたのは幸だ、迎も此の話を、黙つて胸に持つて、東京へは歸られない。旅客は頭をふらくくと、鳩尾を撫でく、

「あゝ、是で少し胸が空いた、よく聞いてくれた、赤帽君、謝す、大に謝す、しかし君にや氣の毒だった。」と眞面目に云ふのも酒なのである。

十二

赤帽は聞く中にも、酔つたか、何となくそはくして、立ちながら足許も定まらぬやうだったが、彼の黄なる目をぎよろつかせて、頻に四邊を見廻したと思ふと、

「旦那……」

旅客は語り果てて恍惚としたのであつた。

膝を屈めて、

「旦那、旦那。」

「あゝ？」

「ぢや、何でございますかな、お綾の阿魔は、」

「おあや、」

「えゝ、綾てえあまつ女、綾子とけちがる。獸でえ、畜生。ぢや、其の今夜は、廣見の別荘に寐ましたかな。」

「寐た……さうだ。何、寂しいの心細いのつて、千之助にいつたのは皆術さ。何しろ、長襦袢一ツで西洋酒を枕頭だから、雪の降るのも花盛り、一夜雲に寐るつもりだらう。」

「で、一人で。」

「然うだ、爺と二人だ。」

「むゝ。……」

と下腹に響いた、呻くやうな獨言。

「此の雪だしよ……旦那、そんな奴は何うすりや可いんでございませう。」

「此方が間拔さ。」

「いんえ、其、其の千之助様に限らずだね、豪い人でも、學者でも、先生でも、色じかけでたらし込みやがつて、世の中に佳い婦人ほど立派なものはない、我を見ろ、とのべつに來やがったら、唯は置けますまい。」

「……………」

「何うすりや、可いんだね。」

「まつ殺すんだ。」

「可うございますかな、殺しても。」と膝を振つて、地踏鞆を踏んで、赤帽は握拳を上げたり下げ

たり。これは酔つた目に見えなかつた。
「可いとも。」

「はあ。」

と氣を詰めた、呼吸を引いて仰むげさまに又壁に凭れたが、腕を拱き、目を瞑つて、熱い息をふツと吹いた。

天窓にぐらぐらと響いて、重い、沈んだ、小さな地震のやうな深夜の物音。

赤帽は潤と目を開け、片手を、衣兜の廣い、上衣の下へ、腕を曲げて突込んだが、つかくと出て、扉を押した。

「汽車が來ました、旦那。」と聲をかけ、然も勞れた體で、椅子の手についた腕の上へ、横顔をつけた旅客の姿を、ちつと見て、狼のやうな腰つき、前屈みになつてづつと出た。

「お、着いたか。」

仰いで時計を見れば、三時四十分。しばらくそれを視めたなりに、旅客は外套の袖を合せたばかり、動かないで居た。

赤帽が來るのを待つたのである。荷物は軽い、乗込の世話を頼んだのであるから。一分二分、瞬く間に早や三分、やがて、五分にならうとして沙汰がない。

心許なく、衝と立つたが、鞆を提げ、杯も、罎も、其まゝ、急に待合を出たけれども、何となく物足らず、四邊を胸すと天井高く、壁白く、プラツトフォームのきらびやかな、しかし寂しい、電燈の影に、關ヶ原の雪に埋れしとなむ、偉大なる鐵の蒸氣機關の、たらくと汗を帯びて、黒く艶かに堆く突立つあるのみ。

夜目には其の邊の人の影も届かず、況して構内には、蹶然として高く、纜に我音の響くばかり、立停まれば其も留んで、赤帽の赤い氣勢もなかつた。

「はてな。」

物打案ずる場合にあらず、軽いが提げた、手荷物を、引立てるやうにして、思ひ切つて、五六歩進む改札口。

「お、酷い。」

といふ婀娜な聲して、構外の吹雪の中、一旦停車場前の廣場に出たのが、吹き戻されて飛び返つた、カラ／＼と駒下駄の音高く、たゞきを迂るやうに後じさり、少い旅客と背中合せ。

十三

唯見ると古代紫の頭巾を深く、紫紺縮緬の肩掛を無造作に引かけて、鐵御納戸無地のお召縮緬

の薄手なコオト、絹手袋の紺淡く、細りと指の長いのが、手提の旅行鞆に、縞珍の信玄袋を持添へた、丈だちすらりと、然ればこそ風には堪へじ柳腰、梅の薫を膚に籠めて、艶に品好き婦人である。

見返ると、振向いて、

「あれ！」

「呀！」

「千之助さん、」

「姉さん、」

「千之助さん。」

「姉さんか。」

と思はずたじくと後に退つた。

夫人はぢつと立つて瞻りたるのみ。

「まあ、よく来てねえ。」といった聲、面をかくして曇つたが、忙しげに、結び目を解く眩寒く、かつ散る袖の寒紅梅、もどかしさうにかなぐつて頭巾を取つた顔は、星の目、眉の月の影、緑の黒髪はらくくと、亂れ銀杏のおくれ毛にも、一筋の曇を帯びず、極めて晴やかなものであつた。

旅客の傍へつツと寄つて、

「御無事？」

と頷くやうにして聞いて、然も嬉しさうに莞爾する。

此方は酔ひたる顔を背けて、――

言出です。

夫人は早く心を汲んだ、廣く且つ遠く離れて居ても、深き思はしつくりと、互に心に相合して、此の構内にしゞまりつつ、

「お絹さんも亡くなつて、……」

とばかり涙ぐんでいつたのである。

「姉さん。」

「さあ、行きませう。」

「否、私は此の汽車で歸るんです。」

「歸るんです。」

「昨日お宅へ参つたんですが、折悪く、お留守だつた。姉さん、手紙で悉しく、失禮、汽車が出ますから。唯ね、酒を、酒を飲まして下さいよ。」

と名残惜しさうに、懐しさうに、うら悲しげな顔をして、早や立別る、二足三足、追ひ絶つたと見るといきなり、千之助の肩に手をかけた、思が籠つて、手が發奮んで、緊乎頸を搔抱き、「歸さない、歸さない、歸さない、歸さない。」

「ですが、」
「否、歸さしません！ さあ、早く行つてお酒を飲みませう、私も飲んでよ。」
行かうとする、留めるので、二ツ三ツ、改札口に近く、蹙音を交へた。途端に、轟と鳴つて、咫尺を辨ぜざる雪の中を偉人の發程、早く既に遠參尾の山野を壓して、行方遙に、汽車はすすると出たのである。

「大變な雪ね。」
「ぢや、何ですか、關ヶ原で。」
「はあ、埋つたの。生れてからはじめてだわ。ですからさ、九時に着くのに乗後れて、明日の一番と思つただけれど、何だか歸りたくなつたのよ、蟲が知らせたのね、行きませう。愚圖々々して居ると凍死んぢまふの。」

とつか／＼と蓮歩を運び、威勢よく微笑みながら、
「雪に埋つたり何かして、氣の利かない汽車ツたらありやしない、漸々、出られたのも、私の思

だわ、眞個よ。」

「大分、悪くおつしやいますな、夫人。」

「おや。」

「唯今お歸りですか。」

と横合から出て、構の眞中に來て立停つたのは、當驛長の何某氏、頬の豊かな、眉の凛々しい、鼻の高い、口髯の美しい、年配四十五六の紳士である。

續いて、どか／＼と其の左右に八九名、皆一様の扮装して、肅然として立並んだ、いづれも局内の係員、最後の列車を送り果てて、各がじし、慙くて家路に就かうとするので。

瓦斯を三ツ四ツ提げたのが立交つて、灯はどれともなく、五ツ六ツ消えて暗くなつた。

十四

「ほ、立聽をなすつたのね。」

「は、は、いや、串戲は止して、これからお歸宅にならうといふのですか、志那忠でもお起しなさい、酷い雪です。腕車なんざ思ひも寄らずですよ、迎も御婦人に、歩行かれるもんぢやない。」
「だつて、自分の内を見て、旅籠屋は厭ですもの、何ともありはしませんよ。」

「勿論。お連がある。」

「失禮、あの、赤帽は居ないんですか。」と目を留められたのを機に、千之助は尋ねて見た、少なからず心に懸るのである。

ト、驛夫の中の一人が、

「貴客、赤帽は最う疾うに居りません。唯今此の汽車で、此處へお下りなすつたのは、夫人、貴女お一人でした。」

「はあ、唯一人。出口から構はず吹雪の中へ飛込みますとね、渦になつて捲くんですの、くるくるまはりながらあとじさりに駆け込んだ時は、呼吸が塞がつて、死にさうよ。今度は大丈夫。」

「驛長さん、預けて行きますよ、千之助さんも然うなさい。そんなものを持つちや歩行けやしな

いから、何うぞね。」

驛長は快諾して、

「宜しい。おい、宿直の處へ持つて行つて預かつてお上げ。」

「憚様、恐入りますね。」

「大層お身軽になりましたな。」

「御免なさいよ。」

とて褻引上げ、頭巾をかぶると、駒下駄を脱いで、襦袢の裾の紅深く、身軽う、た、きへ足袋蹴足。

「否、私が」と自分で、腰かけの下へ突込んで、

「それでは、誰方も。」

「氣をつけていらつしやい。」

「千之助さん、参りませう。」

並んで立向ふ名古屋の市は、打見にも、厚くも狭くもなつて居た、あまりの雪に、灯の影も見えず、二人の肩は最う霏々。

「大丈夫ですか、夫人。」驛長が聲をかける。

「否、雪さへ降れば、寄宿舎の庭でよくやつたの。」

「然し唯今のは、道行のやうですな。」

「油繪の書割ねえ。」

「嫣然、千之助の手を取つて、衝と躍り込むと、浴びせたやうに、一刷颯と吹いて、二人の姿は、眞白になつて隠れたのである。」

「確りなさい、確りして下さい、姉さん。」

「あ………あい。」

「痛むんですか、酷く痛むんですか。」

「そんなぢやありません。」

といふ聲も息の下、夫人は千之助の外套の袖の下に、小やかに雪に埋れて居る。

「困りましたな、困つたな、差込むんですか、苦しいんですか。」と一心に背中をさすつて、

中も、吹雪に面を向くべからず、折から頼む樹陰もなく、身を圍ふべき廂もない、二人はトある

侍町の生垣の根を便つたが、それさへ冷い眞綿の關、袖が觸れても氷が崩れる。

「冷えたんだ、恐しく寒いもの。私は是でも、酒があるから未だ凌げる、汽車の中で冷くなつた

處へ、雪路を跣足は無謀だつた、確りなさいよ、弱つたな、姉さん、姉さん。」

男の衣服の裾に縋つて、しばらく口も利かなかつたが。

「千之助さん、打棄つて置いて行らつしやい、貴下だつて煩ふもの。」

「串戯ぢやありません、是からお宅へ行つて、人を呼んで来るまでによ、貴女の身體は凍つて了

ふ。おんぶをすりや反るんだもの。驚いた、え、酷い、亂暴な降だ。」

「私や、私や、あんまりだから、千之助さん。」

「え。」

「笑はうと思ふけれど、苦しくつて笑へないの。」

「眞個に泣くより笑ですな。」

強ひて慰めるやうに情ない調子で言つたが、吃驚して留めた、慌しさ。

十五

「あ、そんなものを喰べちゃ不可い。」

夫人は苦痛に堪へやらず、左手を男に縋りながら、雪を片手に掴んで震へる。

「水一口ないのかな！」

と殆ど絶望の聲を上げた時、風がなぐれて吹きまはした、粉雪の底に、唯見ると高い窓灯、庭

も屋根も、心覚えの、是ぞ恰も鼻緒を切つた折戸なのである。

膽を貫かれた心地して、胸を衝く千萬無量、思を繞らすに違あらず。

「姉さん、別荘に灯が見えます、必死の勇でお起ちなさい。」

と両手を取つて引起すと、灯の力と、男の腕、腕を小脇に搔込んで、引抱へるやうにして、飛

びつくと、塞がつたのは積つた所爲で、枝折戸は開いて居た。

千之助も、もう跣足。

一人か、二人か我さら知らず、夢中で重い體を築山の上へ上げて、硝子扉に打附かり、聲もかけず、突然引手を捻るとハタと開く。救の鍵は手にあつた。

袖を拂ふ隙も惜しや、其まゝ、絨氈の上へよろけ込むと、裾、袂を、ばら／＼と落つる雪の、亂るゝや、散るや否や、颯と紅に染まつたのは、敷物の色の映るのではない、床に流れた血汐である。

夫人はやう／＼、閉ぢられたやうな目を開けたが、頭巾をもちてはらりと溢るゝ、もつれ毛の露の隙から、室内を一目見て、

「おゝ、綾子さん。」といった。
寢臺の上。

今は面のほてるばかり、暖き暖爐に、ふくらかな乳房仄に、引結へる水淺黄、搔卷の襟を漏れて、いぎたなき長襦袢の胸、柔かに白く仰向いて、裾に片膝を立てたる寢姿。枕に鬢の亂れをかけて、がつくりと横に垂れた、湯上りの寝白粉、まだ其の色も褪めやらぬに、雪の顔蒼然として、咽喉にがばと鮮紅、血は長く其處から垂れて、床に花片を重ねたのであつた。

夫人は健康を復したが、

「苦」といふと椅子に僵れた。

千之助も飛退つて、扉をドンと背につける。

揺ぐわ、揺ぐわ、傍の窓掛、凸に片目を出して、ざろりと様子を伺ふ者あり。

赤帽がぬツと出た。

渠は酔へる時よりは、なほ面赤く、茶褐色の薄髻の中に微笑を浮べて、

「旦那、殺りましたぜ、旦那。は、は、此の通りだ。」

といつて、綾子が玉を伸べた項の中央、疵口を、赤帽は手に取つて、明晃々たる鋭き小刀の背で叩いた。

夫人はハツと面を蔽うた、袂も振も戦いたのである。

「一突にやつたでがすがな、未だなか／＼汽車は出まい、首を持つて行つて、一番お目かけようと思つて。」

と血みどれの手を、すばと、冷艶比類なき犠牲の、心ばかり瘦せた顫にかけると、髪がゆらぎ、節櫛がカチリと落ちる。

千之助は足が浮いた。

「ト當てがつて置いて、ちよき／＼やりはじめた處へ、不意に飛込んでおいでなすつたで、かく

れたですがな、能く来て来たさつたい、私はね、紫川なんのとおつしやつたけれど、旦那が千之助様だとは知つたですよ。可い心持でせうね、私もせいしくした、は、は、は、は、

と哄然として又一笑した。此の時の渠の風采は、緋なる其の帽、雪夜の天を蔽ひ、兩眼に凶星あり、足に氷海を踏み、手に尖刀を提げた、一個巨なる悪魔の如き堂々たるものであつた。是には唯目禮して、千之助は夫人の前。

「姉さん、どうしませう。仔、仔細あつて、私が殺したも同然なんです。」

「え、と驚いて顔を上げた、夫人の臉は、死骸よりも一層蒼白なものであつた。」

「あの、私が死にませうか。」と千之助は屹といふ。

赤帽は小刀を植ゑたやうに、寢臺に兩手をかけて、大きく乗出し、平然として、

「貴郎方、心配はありませんで、何ね、旦那を喜ばせようと思つたのは、ハケ次第だ。此の婦人は、私が兄貴の敵ですよ。」

こりやね、前に兄貴の媽々だつたでさ。兄貴は、商人の癖に、本人望といふで、此の阿魔久しい間、東京へやつて、豪い學者に仕立てたですよ、馬鹿野郎、蝦茶を緋の袴ほどに難有がつたで、自分で一つ學校を立てるなんのといふ口に乗つて、恐しく金子を注ぎ込んだもんでがす。何、皆浮氣に使つたのは私を知つてまさ、其のね、私さへ、一寸口説いたくらゐな奴だ。

現在弟に不義をしかける、そんなものに、何の未練を、私が證據だ、打棄れ、と言つたけれど、へなちよこめ、其癖紫川や長者町には、向うから落つこちる奴もあつたですが、因果だね。とうとう何です、今の亭主におもて向き寢返りを打たれると、其の時分貸して置いた、此の別荘まで公事沙汰に負けて取られてでさ、何しろ、りうとしたお役人だ、家も落目になつたんで。地體此の西洋室なんぞも、ハイカラ阿魔の御機嫌とりに、兄貴が拵へたもんだからね、海も山もくれてやれと、さつぱりすりや可しだけれど、意氣地なしだからね、そんな、こんなで、氣が違つて、お去らばだ。

兩親も達者だつたが、其を苦にして死にました。

私ア自分が嫌はれたつて、密通をされたつて、出刃を掉るやうな吝なんぢやありません。婦人は口説くもの、金は湧くものと思つてゐるんだけど、兄貴の敵だ。畜生、あのエービーシーと唇を反らす頤骨を引つこ抜いて、妻楊枝にしてくれようと、いつも心かけて居たですがな。

不可ません。餘りだらしがないから私ア癩に障つて、一番兄貴のどてツ腹を抉つて、血を入れてくれようと、無暗に有金をつかみ出して、勳當をされると強請に行つた。

は、は、おふくろにや出刃を向ける、おやぢにや短銃をさしつける、兄貴にやナイフをひらめかす、土藏の下へ地雷火をしかけて、線香花火に火をつけたのを持つて、十間間口、一杯に立

はだかつて、ゆすつたですね。

鹽屋の二番は氣が違つた、氣が違つたと皆風説をしたでがせう。

兄貴も氣が違つて死んだんだ、系統を引くと謂ひますから、私が今女を殺すと、誰も本氣の沙汰にやしません。

氣違も色情狂だ、下さりませんや。

折があつたらと、心がけてね、衣兜にや平時ナイフは呑んでるましたけれども、手は出さないで居たですが、旦那でさへ、殺したいとおつしやつたわ。堪忍は身分のある人がすることだ。

私はね、旦那を學者だと見たですよ、先生だと睨んだね、學者の先生でさへ殺したい、殺したいが殺さないのは、身分を思ふからだとなつた日にや、してこいなだ。氣違ぢやありませんや、おまけに、別荘へ寝やがつて、この雪は、開いた口へ、眞白な牡丹餅です。

は、は、一口にやつつけました、は、は、と大口を開いて笑ふ。

「姉さん、此の人が氣が違つたんぢやない、私が氣が違つたんです、飛んだ事を云つたんです。」

「旦那、御心配をなさいますな、私はね、こればかりも。」

と爪尖を出して見せた、一時間の前は蒲鋒をつまんで、舌鼓をして嘗めた手の。

「其の、命が惜くてした仕事ぢやありません、立派に願つて出てお處刑を受けるですよ、これで

先づ、久しく不孝をした、兄貴や兩親に逢つてあやまりませ、死んだら眞人間になりませう。

「絲瓜でもないがね、すぢを引いた氣違ひだと謂はれるのは業肚だ、それだけは含んで下さい、それも、何、おもて向きに云つて下さるとお名前が出る、世の中は盲千人、學者の旦那が、蔭で承知をしておくんなさりや萬人力だ、心がかりはありません。」

夫人！

「は………い。」

「お見受け申した處が、千之助様のおつしやつた、お姉様のやうでございますな。御兩親はなし、思つた方はお亡くなさる、千之助様は最惜い方だ。優しい旦那だ、貴下、可愛がつて世話をしてお上げなさい、恚う云つちや失禮だが、はじめにお見上げ申してから、何だかなくなつた兄貴のやうでなりません、唯兄貴は商人の世間見ずの坊ち野郎だ。旦那は學者の先生だが、人情は一ツでさ、私は亂暴をしましたかね、これでなか／＼兄思ひなんですよ、夫人、よく見てお上げなさいまし。」

「はい………はい。」といつたがあどけない娘のやうに頷いた。

「酒も澤山は毒ですぜ。」といひ澁つて、赤帽は屹然と立つて目をしばた、いた。

夫人は聲を忍んで泣いた、千之助も落涙した。

物と息。此の物語に秘すべきは、夫人が實の姉ではなく、姉妹のやうだつた、千之助の戀人絹子が信友であることではない、夫人二人の良人の名と、及び其の地位とである。

更めて、

「姉さん。」

「あゝ。」とやうく涙の顔。

「どうも此の人は殺されません、私が、代りに死ぬと云つても、姉さんも殺すまい、君も肯くまい。其處でだね、姉さん、凡そ貴女の名望と、憚りだけれど、其の御容色で、非常の場合です、此の名古屋で、凡そ、此の土地に於て、樞要の地位にある人の幾人が欺けます、否、欺くんぢやない、歎願する、歎願して、言に従はされるでせう。」

「命乞ひ?」

「然うです、旅行券をごまかして外國へ遁がすんです。」

「然うね。」

とぼつちり清しい目ざし、早や映る、綾子の死繪に慄然としながら、

「千之助さん。」

「え。」

「手を。」

指をおさへて、一人……二人……三人……四人……五人と算ふると互に頷き、目を見合せて、

昭和十五年七月二十五日印刷
昭和十五年七月三十一日發行

鏡花全集第八卷

著者

泉鏡太郎いづみ かがやき たろう

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

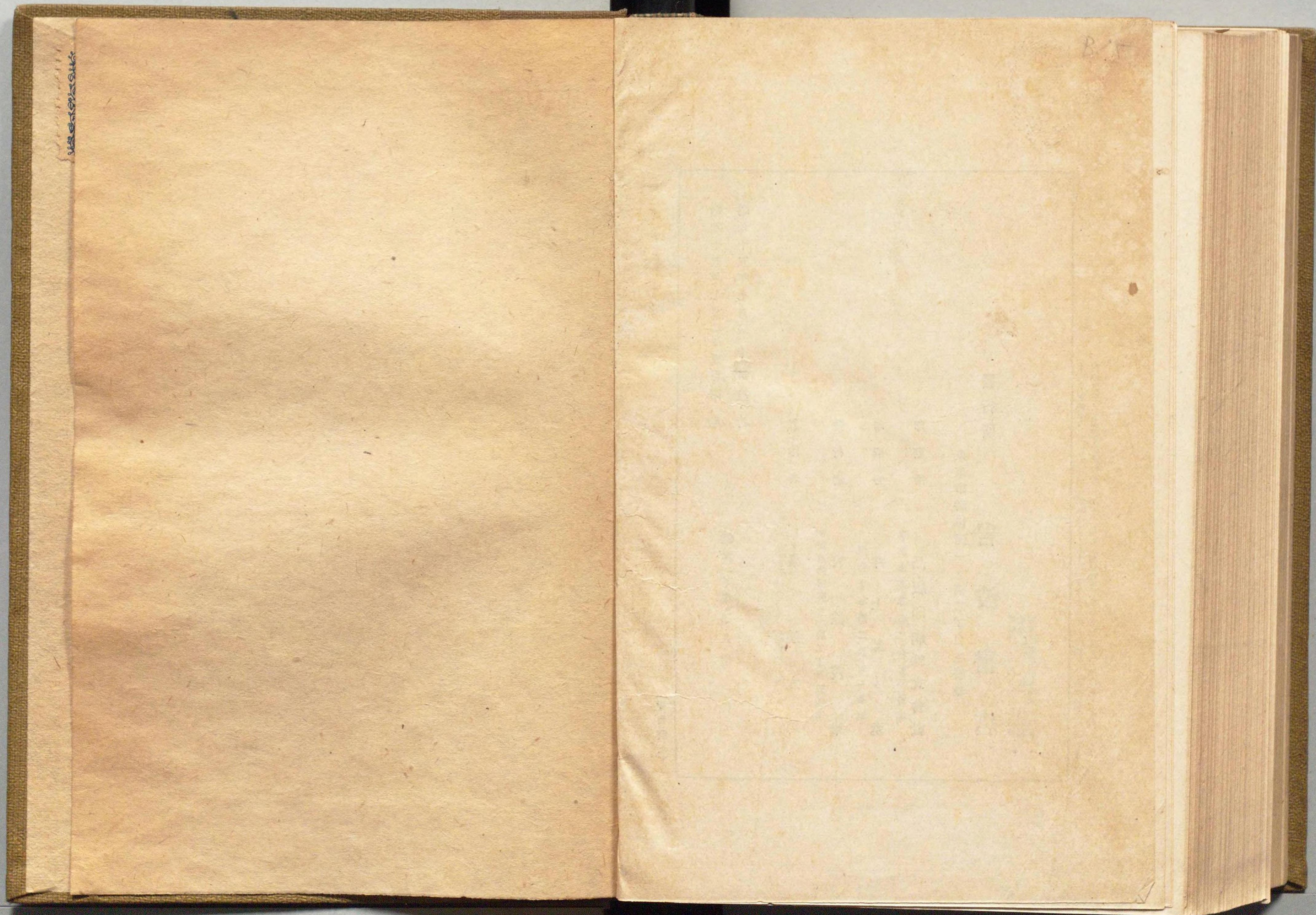
發行所

岩波書店

電話(三)一八七・一八八番
九段(一)一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁)等がありましたら、御手数から洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても、早速お取替致します。

(寺島製本)



798
167

